

Sun Server X4-2L

Linux オペレーティングシステムインストールガイド



Part No: E49409-01
2013 年 9 月

Copyright © 2013 Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS:

Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ, AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	5
最新のソフトウェアとファームウェアの入手	5
このドキュメントについて	5
関連ドキュメント	5
フィードバック	6
サポートとアクセシビリティ	6
1. Linux オペレーティングシステムのインストールについて	7
サポートされている Linux オペレーティングシステム	7
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux	8
コンソール表示オプションの選択	8
コンソール表示オプション	9
▼ ローカルコンソールを設定する	9
▼ リモートコンソールを設定する	9
ブートメディアオプションの選択	10
ブートメディアオプションの要件	10
▼ ローカルブートメディアオプションを設定する	11
▼ リモートブートメディアオプションを設定する	11
インストール先オプションの選択	12
インストール先のオプション	12
▼ ローカルストレージドライブ (HDD または SSD) をインストール先として設定する	13
▼ インストール先としてファイバチャネル Storage Area Network デバイスを設定する	13
Linux OS のインストールオプション	13
サーバー 1 台構成のインストール方法	14
補助付き Linux OS インストール	14
Linux OS の手動インストール	14
Oracle System Assistant の概要	15
Oracle System Assistant のタスクの概要	15
「Get Updates」および「Install OS」タスク	16
Oracle System Assistant の取得	16
2. オペレーティングシステムのインストールの準備	19
BIOS の設定	19
▼ BIOS の出荷時デフォルトを検証する	19
▼ Legacy BIOS と UEFI BIOS を切り替える	22
RAID の構成	23
3. Linux オペレーティングシステムのインストール	25
Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール	25
▼ Oracle System Assistant を使用して Linux OS をインストールする	25

メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール	28
Oracle Linux OS のインストールのタスクマップ	28
準備作業	29
▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して、Oracle Linux 5.9 をインストールする	30
▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して Oracle Linux 6.3 または 6.4 をインストールする	37
▼ PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする	49
Oracle Linux のインストール後のタスク	51
メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール	51
RHEL のインストールのタスクマップ	52
準備作業	52
▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.9 をインストールする	53
▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 6.4 をインストールする	55
▼ PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする	58
RHEL のインストール後のタスク	61
メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール	63
SLES 11 SP2 のインストールのタスクマップ	64
準備作業	64
▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した SLES 11 SP2 のインストール	65
▼ PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする	71
SLES 11 SP2 のインストール後のタスク	73
4. ネットワークインタフェースの構成	75
NIC コネクタ	75
索引	77

このドキュメントの使用方法

このインストールガイドでは、Linux オペレーティングシステムのインストール手順と、Oracle の Sun Server X4-2 を構成可能かつ使用可能な状態にするためのソフトウェアの初期構成に関する手順について説明します。

このドキュメントは、技術者、システム管理者、承認サービスプロバイダ (ASP)、およびオペレーティングシステムのインストールについての経験を持つユーザーを対象としています。

このセクションでは、最新のソフトウェアとファームウェア、ドキュメントとフィードバック、およびサポートとアクセシビリティ情報の入手方法を説明します。

- [5 ページの「最新のソフトウェアとファームウェアの入手」](#)
- [5 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [5 ページの「関連ドキュメント」](#)
- [6 ページの「フィードバック」](#)
- [6 ページの「サポートとアクセシビリティ」](#)

最新のソフトウェアとファームウェアの入手

各 Oracle x86 サーバー、サーバーモジュール (ブレード)、およびブレードシャーシ用のファームウェア、ドライバ、その他のハードウェア関連ソフトウェアは定期的に更新されます。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – これは、工場出荷時にインストールされる Oracle x86 サーバー向けの新しいオプションです。必要なすべてのツールとドライバが含まれており、サーバーに組み込まれています。
- My Oracle Support: <http://support.oracle.com>
- 物理メディアの申請

詳細は、『設置』のサーバーファームウェアとソフトウェア更新の入手に関するトピックを参照してください。

このドキュメントについて

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。情報は (オンラインヘルプと同様の) トピック単位の形式で提供されるので、章、付録、セクション番号はありません。

特定のトピック (ハードウェア設置やプロダクトノートなど) に関するすべての情報が含まれる PDF バージョンを生成するには、HTML ページの左上にある PDF ボタンをクリックします。

関連ドキュメント

ドキュメント	リンク
すべての Oracle ドキュメント	http://www.oracle.com/documentation

ドキュメント	リンク
Sun Server X4-2L	http://www.oracle.com/goto/X4-2L/docs
Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド	http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack 2.2	http://www.oracle.com/goto/OHMP/docs

フィードバック

このドキュメントについてのフィードバックは、次の場所で送ることができます。

<http://www.oracle.com/goto/docfeedback>

サポートとアクセシビリティ

説明	リンク
My Oracle Support を通じた電子的なサポートへのアクセス	http://support.oracle.com
	聴覚障害の方へ: http://www.oracle.com/accessibility/support.html
アクセシビリティに対する Oracle のコミットメントについて	http://www.oracle.com/us/corporate/accessibility/index.html

1

・・・ 第 1 章

Linux オペレーティングシステムのインストールについて

このセクションでは、サーバー に新しい Linux オペレーティングシステム (OS) をインストールする手順の概要を示します。

説明	リンク
どの Linux オペレーティングシステムがサポートされているかを学習します。	7 ページの「サポートされている Linux オペレーティングシステム」
Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux とそれを使用できる場合について学習します。	8 ページの「Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux」
コンソール表示オプションとそれらの設定方法について学習します。	8 ページの「コンソール表示オプションの選択」
ブートメディアオプションとそれらの設定方法について学習します。	10 ページの「ブートメディアオプションの選択」
インストール先オプションとそれらの設定方法について学習します。	12 ページの「インストール先オプションの選択」
OS のインストールオプションについて学習します。	13 ページの「Linux OS のインストールオプション」
Oracle System Assistant について学習します。	15 ページの「Oracle System Assistant の概要」

関連情報

- [25 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」](#)

サポートされている Linux オペレーティングシステム

サーバー は次の Linux オペレーティングシステムをサポートしています。

Linux OS のバージョン	版
Oracle	Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux または Red Hat 互換カーネルを備えた x86 (64 ビット) 向け Oracle Linux 5.9、6.3、および 6.4
Red Hat	Red Hat Enterprise Linux 5.9 および 6.4 for x86 (64 ビット)
SUSE	SUSE Linux Enterprise Server 11 SP2 (64 ビット)

さらに、サポートされているその他のオペレーティングシステムや仮想マシンソフトウェアをサーバーにインストールすることもできます。<http://www.oracle.com/goto/X4-2L/docs>にある最新バージョンの『Sun Server X4-2L プロダクトノート』を参照してください。サポートされているオペレーティングシステムの一覧は、<http://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Sun+Server+X4-2L+-+Operating+Systems>でも確認できます。



注記

Oracle Linux 6.x OS がインストール済みの場合、そのインストールは、サーバーがレガシー BIOS に設定された状態で行われました。UEFI BIOS ブートモードでサーバーをブートすることにした場合、インストール済みのイメージにアクセスすることはできません。したがって、UEFI/ BIOS ブートモードを UEFI BIOS に設定した状態で Oracle Linux 6.x OS を使用するには、Oracle Linux 6.x の新規インストールを実行する必要があります。

関連情報

- [25 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」](#)

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux は、Oracle Linux 5.9 および 6.3 にデフォルトでインストールされる推奨カーネルであり、Red Hat Enterprise Linux 5 .9、6.3、および 6.4 にインストールすることができます。

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux は、Oracle の厳しいテストを受け最適化された、Oracle Linux 5 および Oracle Linux 6 用のオペレーティングシステムカーネルの 2 番目のメジャーリリースです。これは 3.0.16 メインライン Linux カーネルに基づいており、カーネルの最初のバージョン以降にメインライン Linux に組み込まれた改良点と新機能が含まれています。

関連情報

- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のオペレーティングシステムの互換性やインストール情報の参照先に関する最新情報については、次の *Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 のリリースノート* を参照してください。

<http://oss.oracle.com/ol6/docs/RELEASE-NOTES-UEK2-en.html>

- [25 ページの「Linux オペレーティングシステムのインストール」](#)

コンソール表示オプションの選択

このセクションでは、インストールを実行するためにコンソールを接続するオプションについて説明します。

- [9 ページの「コンソール表示オプション」](#)
- [9 ページの「ローカルコンソールを設定する」](#)
- [9 ページの「リモートコンソールを設定する」](#)

コンソール表示オプション

ローカルコンソールをサーバーのサービスプロセッサ (SP) に直接接続することにより、OS のインストールやサーバーの管理を実行できます。サーバーでは、2 種類のローカルコンソールをサポートしています。

- シリアル管理ポート (SER MGT) に接続された端末

端末を、ポートに直接接続することも、ポートに直接接続した端末エミュレータに接続することもできます。

- ビデオポート (VGA) と 2 つの背面 USB コネクタに直接接続した VGA モニター、USB キーボード、および USB マウス

サーバー SP へのネットワーク接続を確立することにより、リモートコンソールから OS のインストールやサーバーの管理を行うこともできます。2 種類のリモートコンソールがあります。

- Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用した Web ベースのクライアント接続
- ネットワーク管理ポート (NET MGT) への Secure Shell (SSH) クライアント接続

▼ ローカルコンソールを設定する

1. ローカルコンソールを接続するには、次のいずれかを実行します。
 - 直接または端末エミュレータを介して、シリアル管理ポート (SER MGT) に端末を接続します。
 - VGA モニター、キーボード、マウスをビデオポート (VGA) と USB ポートに接続します。
2. シリアル管理ポート (SER MGT) 接続の場合のみ、ホストシリアルポートへの接続を確立するには:
 - a. Oracle ILOM のユーザー名およびパスワードを入力します。
 - b. Oracle ILOM プロンプトで、次を入力します。

```
-> start /HOST/console
```

シリアル管理ポート出力は、Linux ホストシリアルローカルコンソールに自動的にルーティングされます。

関連情報

- <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ

▼ リモートコンソールを設定する

1. サーバー SP の IP アドレスを表示または設定します。
コマンド行インタフェースまたは Web インタフェースのどちらかを使用して Oracle ILOM にリモートからログインするには、サーバーのサービスプロセッサ (SP) の IP アドレスを知っている必要があります。手順については、『設置』「サーバー SP の IP アドレスの確認」を参照してください。

2. Web ベースのクライアント接続を使用している場合は、これらの手順を実行します。それ以外の場合は次の手順に進みます。
 - a. Web ブラウザで、サーバー SP の IP アドレスを入力します。
 - b. Oracle ILOM Web インタフェースにログインします。
 - c. Oracle ILOM リモートコンソールを起動して、ビデオ出力をサーバーから Web クライアントにリダイレクトします。
 - d. 必要に応じて、「Devices」メニューでデバイスのリダイレクト (マウス、キーボードなど) を有効にします。
3. SSH クライアント接続を使用している場合は、次の手順を実行します。
 - a. シリアルコンソールから、サーバー SP への SSH 接続を確立します (**ssh root@hostname**。ここでは、hostname はサーバー SP の DNS 名または IP アドレス)。
 - b. Oracle ILOM にログインします。
 - c. 次を入力して、シリアル出力をサーバーから SSH クライアントにリダイレクトします。

-> **start /HOST/console**

関連情報

- <http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs> にある Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.1 ドキュメントライブラリ。

ブートメディアオプションの選択

サーバーへのオペレーティングシステムのインストールを開始するには、ローカルまたはリモートのインストールメディアソースをブートします。このセクションでは、サポートされているメディアソースと各ソースのセットアップ要件について説明します。

- [10 ページの「ブートメディアオプションの要件」](#)
- [11 ページの「ローカルブートメディアオプションを設定する」](#)
- [11 ページの「リモートブートメディアオプションを設定する」](#)

ブートメディアオプションの要件

このセクションでは、ローカルおよびリモートメディアを使用するための要件について説明します。

- [10 ページの「ローカルブートメディアの要件」](#)
- [11 ページの「リモートブートメディアの要件」](#)

ローカルブートメディアの要件

ローカルブートメディアでは、サーバー上の組み込み型ストレージデバイスまたはサーバーに接続された外付けのストレージデバイスが許可されています。

CD/DVD インストールメディアは、次のどの方法でも使用できます。

- インストールメディア CD/DVD は、サーバー DVD ドライブに挿入できます。
- インストールメディア CD/DVD は、サーバーに接続している外付け DVD ドライブに挿入できます。

-
- ・ インストールメディアは、USB フラッシュドライブにコピーして、サーバーの外付け USB ポートか内蔵 USB ポートのいずれかに挿入できます。

リモートブートメディアの要件

リモートメディアでは、ネットワークを介してインストールをブートする必要があります。ネットワークインストールは、リダイレクトされたブートストレージデバイスか、Pre-boot eXecution Environment (PXE) を使用してネットワーク上にインストールをエクスポートする別のネットワークシステムから開始できます。

サポートされている OS のリモートブートメディアソースには、次のものがあります。

- ・ リモート DVD ドライブに挿入された CD/DVD-ROM インストールメディア
- ・ 仮想リダイレクション用に設定されたネットワーク上の場所で使用できる DVD/ISO イメージ
- ・ PXE ネットワークブートとして使用できるようにした DVD/ISO イメージ。サポートされている Linux オペレーティングシステムの PXE ネットワークインストールを実行する手順については、次の各セクションを参照してください。
 - ・ [49 ページの「PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする」](#)
 - ・ [58 ページの「PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする」](#)
 - ・ [71 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする」](#)

▼ ローカルブートメディアオプションを設定する

ローカルブートメディアを設定するには、次のいずれかのオプションを使用して、Linux OS インストールメディアが格納されているストレージデバイスをサーバーに装着する必要があります。

1. サーバーにオプションの DVD ドライブが装備されている場合は、サーバー前面の DVD ドライブに Linux OS インストール DVD を挿入します。それ以外の場合は、次の手順に進みません。
2. サーバーに DVD ドライブがない場合は、サーバー前面または背面の外部 USB ポートの 1 つに、Linux OS インストールメディアが格納された USB フラッシュドライブを装着します。



注記

サーバーの外部 USB ポートの場所については、『[設置](#)』の「サーバーの機能とコンポーネント」を参照してください。

▼ リモートブートメディアオプションを設定する

リモートストレージデバイスからブートメディアをリダイレクトするには、次の手順を実行します。

1. ブートメディアを、次のようなストレージデバイスに挿入します。
 - ・ **CD/DVD-ROM の場合**、リモートワークステーション上の組み込み型または外付けの CD/DVD-ROM ドライブにメディアを挿入します。

- ・ **CD/DVD-ROM ISO** イメージの場合、ネットワーク共有された場所で ISO イメージがすぐに利用できることを確認します。
- 2. サーバー Oracle ILOM SP への Web ベースのクライアント接続を確立し、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを起動します。
詳細は、[8 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)に示す Web ベースのクライアント接続に関するセットアップ要件を参照してください。
- 3. Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションの「Devices」メニューで、次のようなブートメディアの場所を指定します:
 - ・ **CD/DVD-ROM** ブートメディアの場合は、「CD-ROM」を選択します。
 - ・ **CD/DVD-ROM ISO** イメージブートメディアの場合は、「CD-ROM Image」を選択します。

インストール先オプションの選択

このセクションでは、インストール先を設定する方法について説明します。

- ・ [12 ページの「インストール先のオプション」](#)
- ・ [13 ページの「ローカルストレージドライブ \(HDD または SSD\) をインストール先として設定する」](#)
- ・ [13 ページの「インストール先としてファイバチャネル Storage Area Network デバイスを設定する」](#)

インストール先のオプション

組み込み型の Oracle System Assistant USB フラッシュドライブ (Oracle System Assistant 用に予約されている) を除き、サーバーに取り付けたどのストレージドライブにもオペレーティングシステムをインストールできます。これらにはハードディスクドライブ (HDD) と半導体ドライブ (SSD) があります。

ファイバチャネル PCIe ホストバスアダプタ (HBA) を備えたサーバーでは、オペレーティングシステムを外付けの FC ストレージデバイスにインストールすることも選択できます。



注記

SSD は Oracle Engineered Systems でしかサポートされません。

重要: USB 組み込み型 Oracle System Assistant 内蔵フラッシュドライブは、ブートまたはストレージドライブとして使用しない

サーバーは、組み込み型 Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを装備した状態で出荷されます。このドライブには、Oracle System Assistant、デバイスドライバ、および Oracle ILOM、BIOS、およびサポートされている IO デバイス用のファームウェアが含まれています。サポートされているすべてのオペレーティングシステムのインストール中に、この USB フラッシュドライブは、読み書き可能な単一パーティションの SCSI ディスクとして検出され、ドライブのリストには `Oracle_SSM` と表示されます。次の操作を実行するときに、このデバイスを上書きしないように注意してください。

- オペレーティングシステムのインストール
- ディスクまたはパーティションのフォーマット操作
- 一般的なディスク、パーティション、またはファイルシステムの保守

この USB フラッシュドライブが上書きされた場合でも、元の内容を復元できます。USB フラッシュドライブの内容を復元するには、Oracle System Assistant 復旧および ISO 更新イメージを取得し、このイメージを使用して復元処理を実行します。

Oracle System Assistant 復旧および ISO 更新イメージをダウンロードし、サーバーの Oracle System Assistant USB フラッシュドライブを復元する手順については、*Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

▼ ローカルストレージドライブ (HDD または SSD) をインストール先として設定する

- HDD または SSD が正しく取り付けられ、電源が入っていることを確認します。HDD または SSD の取り付けと電源の投入方法については、『サービス』の「ストレージドライブおよび背面ドライブ (CRU) の保守」を参照してください。

▼ インストール先としてファイバチャネル Storage Area Network デバイスを設定する

1. サーバーに PCIe HBA が正しく取り付けられていることを確認します。PCIe HBA オプションの設置方法については、『サービス』の「PCIe カードの保守 (CRU)」を参照してください。
2. Storage Area Network (SAN) をインストールおよび構成して、サーバーホストでストレージデバイスが認識されるようにします。手順については、ファイバチャネル HBA 付属のドキュメントを参照してください。

Linux OS のインストールオプション

OS を単一のサーバーにインストールするか、複数のサーバーにインストールするかを選択できます。このドキュメントの適用範囲は、単一のサーバーでの OS のインストールです。次の表に、2 つのインストールオプションに関する情報を示します。

オプション	説明
複数のサーバー	Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用して、複数のサーバー上に OS をインストールできます。詳細は、 http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html にアクセスしてください
単一のサーバー	次のいずれかの方法を使用して、単一サーバーに OS をインストールします。 <ul style="list-style-type: none"> • ローカル: OS のインストールは、サーバーでローカルに実行されます。このオプションは、物理的にラックにサーバーを設置し終えたばかりのときにお勧めします。 • リモート: OS のインストールはリモートの場所から実行されます。Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用して、Oracle System Assistant にアクセスするか、手動による OS のインストールを実行します。

オプション	説明
	注記
	Oracle は、単一サーバーでの OS のインストールには Oracle System Assistant を使用することをお勧めします。

単一サーバーに OS をインストールする方法と Oracle System Assistant の詳細については、次を参照してください:

- [14 ページの「サーバー 1 台構成のインストール方法」](#)
- [15 ページの「Oracle System Assistant の概要」](#)

サーバー 1 台構成のインストール方法

OS インストールメディアを用意する方法を選択します。次の情報を使用して、ローカルかリモートのどちらの OS のインストールがニーズにもっとも適しているかを判断します。

メディアの配布方法	その他の要件
ローカルでの補助付き OS インストール – Oracle System Assistant を使用します (推奨)。	モニター、USB キーボードとマウス、USB デバイス、および OS 配布メディア。詳細は、 14 ページの「補助付き Linux OS インストール」 を参照してください。
リモートでの補助付き OS インストール – Oracle System Assistant を使用します (推奨)。	Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーション、リダイレクトされた CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル、および OS 配布メディア。詳細は、 14 ページの「補助付き Linux OS インストール」 を参照してください。
CD/DVD ドライブを使用したローカル OS インストール – サーバーに接続された物理 CD/DVD ドライブを使用します。	モニター、USB キーボードとマウス、USB CD/DVD ドライブ、および OS 配布メディア。詳細は、 14 ページの「Linux OS の手動インストール」 を参照してください。
CD/DVD の ISO イメージを使用したリモート OS インストール – Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを実行しているリモートシステム上でリダイレクトされた物理 CD/DVD ドライブまたは DVD ISO イメージを使用します。	ブラウザを備えたリモートシステム、接続された物理 CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル、OS 配布メディア、およびサーバーの管理ポートへのネットワークアクセス。詳細は、 14 ページの「Linux OS の手動インストール」 を参照してください。

補助付き Linux OS インストール

これは、サポートされている OS をサーバーにインストールするための推奨方法です。この方法では、Oracle System Assistant を使用します。ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、CD/DVD イメージのいずれかで OS インストールメディアを提供すると、Oracle System Assistant がプロセスを進め、必要に応じてドライバを収集しインストールします。Oracle System Assistant は、使用しているサーバーでサポートされている必要があり、そのサーバーにインストールされている必要があります。

Linux OS の手動インストール

この方法では、ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、または CD/DVD イメージで Linux OS 配布メディアを配信します。必要なドライバをインストールする必要もあります。サーバー用のドライバは、サーバー内蔵の Oracle System Assistant フラッシュドライブ (取り付けられている場合) に用意されており、My Oracle Support のサイトから OS 固有およびサーバー固有のパッケージとして、または ISO イメージファイルとして入手することもできます。OS をインストールするには、配布メディアのインストールウィザードを使用します。

Oracle System Assistant の概要

Oracle System Assistant は、Oracle x86 サーバー向けの単一サーバーシステム管理ツールです。Oracle System Assistant は、Oracle の単一システム管理製品、Oracle System Assistant、および選り抜きの関連ソフトウェアを統合して、サーバーを迅速かつ簡単に構成および管理できるようにするツール群を提供します。

Oracle System Assistant には、ローカルコンソール接続を使用してローカルからアクセスすることも、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用してリモートからアクセスすることもできます。

ラックへのサーバーのインストールが終了した直後の場合、Oracle System Assistant を (物理的にサーバーにいる間に) ローカルで使用することで、サーバーを迅速かつ効率的に起動できます。サーバーが動作すると、すべての機能を維持しながら、Oracle System Assistant にリモートで便利にアクセスできます。

Oracle System Assistant のコンポーネントは次のとおりです。

- Oracle System Assistant アプリケーション
- Oracle Hardware Management Pack
- 構成と保守のプロビジョニングタスク (OS のインストールタスクを含む) へのユーザーインタフェースアクセス
- Oracle System Assistant のコマンド行環境
- オペレーティングシステム用のソフトウェア、ドライバ、およびツール
- サーバー固有のファームウェア
- サーバー関連ドキュメント

Oracle System Assistant は、組み込み型ストレージデバイス (USB フラッシュドライブ) としてサーバー内部に装備されています。ドライブは、すべてのコンポーネントのオンライン更新を使用することによりそれぞれ保守される、サーバー固有バージョンの Oracle System Assistant とともに出荷時に構成されています。

詳細は、次のトピックを参照してください。

- [15 ページの「Oracle System Assistant のタスクの概要」](#)
- [16 ページの「Get Updates」および「Install OS」タスク](#)
- [16 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

詳細については、*Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

Oracle System Assistant のタスクの概要

Oracle System Assistant は、もっとも一般的かつ有用な単一サーバー管理プロビジョニングタスク一式が選択され、まとめられています。

次の情報やタスクは、迅速で便利なサーバーの設定と継続的なサーバー管理を可能にします。

- システムの概要とシステムインベントリ情報
- すべてのコンポーネント (オペレーティングシステムソフトウェア、ツール、ドライバ、ファームウェアなど) のオンラインアップデートの取得
- システムファームウェア (BIOS および Oracle ILOM) とホストバスアダプタファームウェアの更新
- RAID、Oracle ILOM、および BIOS 構成
- 補助付き OS インストール
- サーバーネットワーク構成
- 機能と組み込まれたメディア整合性チェックの無効化
- 多言語キーボード
- 実行時環境を使用可能にする Oracle System Assistant シェル端末ウィンドウ
- Oracle Hardware Management Pack へのアクセス (Oracle System Assistant シェルを使用)
- Oracle System Assistant の復旧

詳細については、*Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

「Get Updates」および「Install OS」タスク

Oracle System Assistant を使用して、OS ドライバとほかのファームウェアコンポーネント (BIOS、Oracle ILOM、HBA、および該当する場合はエクспанダ) を更新する場合は、OS をインストールする前に「Get Updates」タスクを実行するようにしてください。

Oracle System Assistant の OS インストールタスクを実行すると、サポートされている OS をガイドに従ってインストールできます。OS インストールメディアを用意すれば、Oracle System Assistant が示す手順に従ってインストールプロセスを実行できます。続いて、サーバーハードウェア構成に基づいて、適切なドライバをフェッチします。OS のインストールタスクは、サーバーでサポートされているすべてのオペレーティングシステムに使用できるわけではありません。

詳細については、*Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

Oracle System Assistant の取得

Oracle System Assistant がサーバーでサポートされているため、Oracle System Assistant USB フラッシュドライブがすでにサーバーに取り付けられている可能性があります。取り付けられている場合、Oracle System Assistant の「Get Updates」タスクを使用して、最新のソフトウェアリリースに更新できます。Oracle System Assistant がサーバーにインストールされているが、破壊または上書きされている場合は、My Oracle Support Web サイトから Oracle System Assistant アップデートイメージをダウンロードしてください。ダウンロード手順については、『[設置](#)』「サーバーファームウェアおよびソフトウェアアップデートの入手」を参照してください。

サーバーに Oracle System Assistant が存在するかどうかの確認方法、および更新や復旧手順の実行方法については、*Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

関連情報

- *Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド* (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)。

・・・第 2 章

オペレーティングシステムのインストールの準備

このセクションでは、オペレーティングシステムをインストールできるようにサーバーを準備する方法について説明します。

説明	リンク
BIOS の設定。	19 ページの「BIOS の設定」
サーバーでの RAID 構成の設定。	23 ページの「RAID の構成」

BIOS の設定

オペレーティングシステムをインストールする前に、実行する予定のインストールの種類をサポートするように BIOS 設定が構成されていることを確認するようにしてください。次のトピックでは、インストールをサポートするように BIOS を構成する方法について具体的に説明しています。

- ・ [19 ページの「BIOS の出荷時デフォルトを検証する」](#)
- ・ [22 ページの「Legacy BIOS と UEFI BIOS を切り替える」](#)

関連情報

- ・ [25 ページの「Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール」](#)
- ・ [28 ページの「メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール」](#)
- ・ [51 ページの「メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール」](#)
- ・ [63 ページの「メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール」](#)

▼ BIOS の出荷時デフォルトを検証する



注記

新しく設置されたサーバーにはじめてオペレーティングシステムをインストールする場合、BIOS はおそらくデフォルト設定に構成されているため、この手順を実行する必要はありません。

BIOS 設定ユーティリティでは、デフォルトに設定できるほか、必要に応じて BIOS 設定を表示し編集できます。BIOS 設定ユーティリティ (F2) で変更した設定はすべて、次回に設定変更するまで常時使用されます。

F2 を使用してシステムの BIOS 設定を表示または編集できるほか、BIOS の起動中に F8 を使用することで、一時ブートデバイスを指定できます。F8 を使用して一時ブートデバイスを設定した場合、この変更は現在のシステムブートのみで有効です。一時ブートデバイスでブートしたあとは、F2 で指定した常時ブートデバイスが有効になります。

次の要件が満たされていることを確認します。

- サーバーにハードディスクドライブ (HDD) または半導体ドライブ (SSD) が搭載されています。
- HDD または SSD がサーバーに適切に設置されています。手順については、『サービスの「ストレージドライブおよび背面ドライブ (CRU) の保守」を参照してください。
- サーバーへのコンソール接続が確立されています。詳細は、[8 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。

1. サーバーをリセットするか、電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「`reset /System`」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。



2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。

3. 出荷時のデフォルト値に設定するために、次を実行します。

- a. F9 を押すと、出荷時のデフォルト設定が自動的にロードされます。

メッセージが表示され、「OK」を選択してこの操作を続けるか、「CANCEL」を選択してこの操作を取り消すよう指示されます。

- b. メッセージで「OK」を強調表示して、Enter を押します。

BIOS 設定ユーティリティ画面が表示され、システム時間フィールドの最初の値でカーソルが強調表示されます。

-
4. BIOS 設定ユーティリティーで次の手順を実行して、メニュー項目に関連する値を編集します。
 - a. 変更する値を強調表示します。

上下の矢印キーを使用して、メニュー項目を選択します。
 - b. 強調表示された欄の値を変更するには、次のキーを使用します。
 - プラス (+) を押すと、表示されている現在の値が増加します
 - マイナス (-) を使用すると、現在表示されている値が減少します
 - Enter キーを使用すると、選択した項目の値を示すポップアップメニューが表示されます
 5. ブート設定にアクセスするには、「Boot」メニューを選択します。

「Boot」メニューが表示されます。
 6. 「Boot」メニューで、「UEFI/BIOS Boot Mode」がインストールに適した値に設定されていることを検証します。

ブートモードを変更するには、上下の矢印キーを使用して「UEFI/BIOS Boot Mode」フィールドを選択し、+/- キーを使用して「UEFI」と「Legacy」を切り替えます。



注記

Oracle Linux 5.x や Red Hat Enterprise Linux 5.x のインストール時には UEFI/BIOS ブートモードをレガシーに設定する必要がありますが、それは、これらのオペレーティングシステムでは UEFI BIOS がサポートされないからです。

-
7. 「Boot Settings」メニューで、下矢印キーを使用して「**Boot Device Priority**」を選択し、Enter を押します。

「Boot Device Priority」メニューが表示され、認識されているブートデバイスの優先順位が示されます。リストの先頭のデバイスが、ブートの優先度がもっとも高いデバイスです。
 8. 「Boot Device Priority」メニューで次の手順を実行して、リストの最初のブートデバイスエントリを編集します。
 - a. 上下矢印キーを使用してリストの先頭のデバイスを選択し、Enter を押します。
 - b. 「Options」メニューで、上下矢印キーを使用してデフォルトの常時ブートデバイスを選択し、Enter を押します。



注記

変更する各デバイス項目に対して手順 7a および 7b を繰り返して、リスト内のほかのデバイスのブート順を変更できます。

-
9. 変更を保存して BIOS 設定ユーティリティーを終了するには、F10 を押します。

または、「Save & Exit」メニューから「**Save and Reset**」を選択して変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティーを終了することもできます。変更を保存して設定を終了することを確認するメッセージが表示されます。メッセージダイアログで「**OK**」を選択して、Enter を押します。



注記

Oracle ILOM リモートコンソールを使用している場合、F10 はローカル OS にトラップされます。このため、リモートコンソールアプリケーションの上部にある「Keyboard」ドロップダウンメニューから「F10」オプションを使用する必要があります。

▼ Legacy BIOS と UEFI BIOS を切り替える

BIOS ファームウェアは、レガシー BIOS と Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) の両方をサポートしています。デフォルトの設定は Legacy BIOS です。オペレーティングシステムによっては、レガシー BIOS と UEFI BIOS の両方をサポートしているものも、レガシー BIOS だけをサポートしているものもあるので、ユーザーには次のオプションがあります。

- インストールするオペレーティングシステムがレガシー BIOS だけをサポートしている場合は、OS のインストールを行う前に、BIOS がレガシー BIOS に設定されていることを確認する必要があります。
- インストールするオペレーティングシステムがレガシー BIOS と UEFI BIOS の両方をサポートしている場合は、OS のインストールを実行する前に、レガシー BIOS ブートモードと UEFI BIOS ブートモードのどちらかに BIOS を設定できます。



注記

現在、Oracle Linux 6.3 および 6.4、Red Hat Enterprise Linux 6.4、および SUSE Linux Enterprise Server 11 SP2 だけが、UEFI BIOS をサポートする Linux オペレーティングシステムとしてサポートされています。



注記

オペレーティングシステムをインストールしたあとで、レガシー BIOS から UEFI BIOS に、またはその逆に切り替えることにした場合、すべてのパーティションを削除して、オペレーティングシステムを再インストールする必要があります。

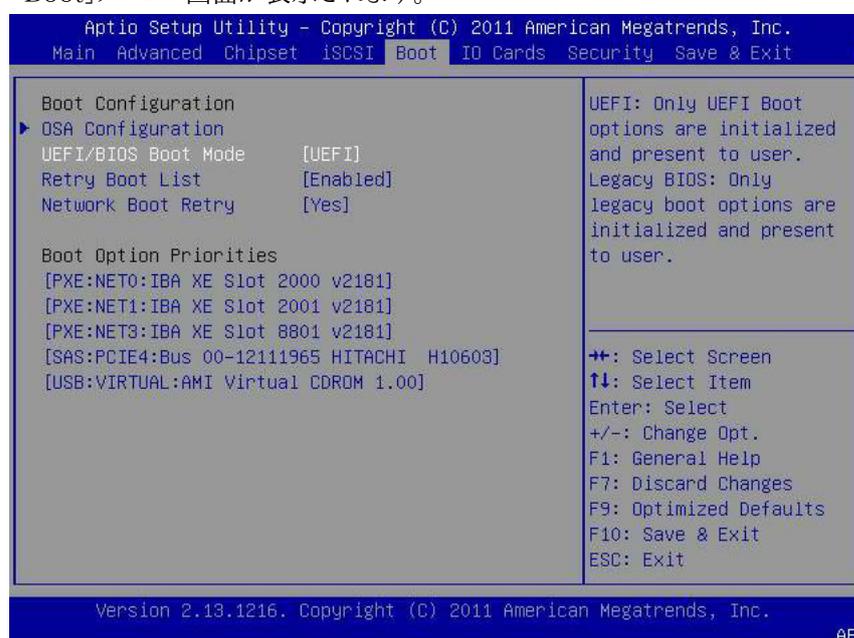
1. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。
たとえば、サーバーをリセットするには：
 - ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - **Oracle ILOM CLI** で、プロンプトから次のコマンドを入力します。

-> **reset /System**

BIOS 画面が表示されます。



2. BIOS 画面でプロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。
しばらくすると、BIOS 設定ユーティリティが表示されます。
3. BIOS 設定ユーティリティで、上部のメニューバーから「Boot」を選択します。
「Boot」メニュー画面が表示されます。



4. 「UEFI/BIOS Boot Mode」フィールドを選択し、+/- キーを使用して、目的のモード (Legacy BIOS または UEFI) に設定を切り替えます。
5. 変更を保存して BIOS を終了するには、F10 キーを押します。

RAID の構成

RAID 構成でサーバストレージドライブを構成する場合、Linux OS をインストールする前にサーバ上で RAID を構成してください。RAID を構成する手順については、『設置』、「OS インストール用のサーバドライブの構成」を参照してください。

関連情報

- Oracle X4 シリーズサーバ管理ガイド (<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>)。

3

・・・ 第 3 章

Linux オペレーティングシステムのインストール

このセクションでは、Oracle Linux、Red Hat Enterprise Linux、および SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムとシステム固有のドライバをサーバーにインストールする手順について説明します。

説明	リンク
Oracle System Assistant を使用した Linux オペレーティングシステムのインストール。	25 ページの「Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール」
メディアを使用した Oracle Linux オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	28 ページの「メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール」
メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	51 ページの「メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール」
メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server オペレーティングシステムの単一サーバーへのインストール。	63 ページの「メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール」

Oracle System Assistant を使用した Linux OS の単一システムへのインストール

Oracle System Assistant アプリケーションの OS のインストールタスクは、サポートされている OS をサーバーにインストールするための推奨方法です。

- [25 ページの「Oracle System Assistant を使用して Linux OS をインストールする」](#)

▼ Oracle System Assistant を使用して Linux OS をインストールする

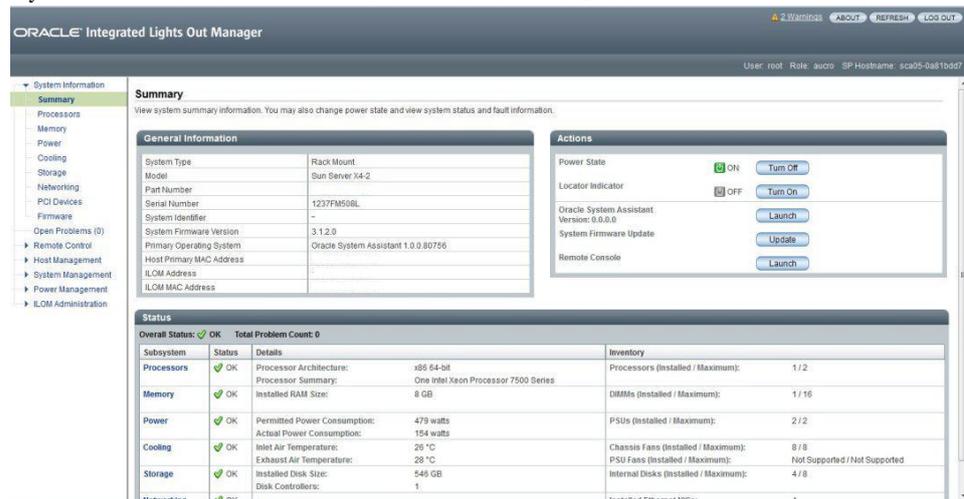
この手順を始める前に、次を実行します。

- [19 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」](#)の手順を実行します。
 - ブートドライブ (OS のインストール先ストレージドライブ) を RAID 用に構成する場合は、Linux OS をインストールする前にそれを実行する必要があります。サーバーで RAID を構成する方法については、『[設置](#)』、『[OS インストール用のサーバードライブの構成](#)』を参照してください。
1. インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - ディストリビューション **CD/DVD** の場合。Linux メディア (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) をローカルまたはリモートの CD/DVD-ROM ドライブに挿入します。

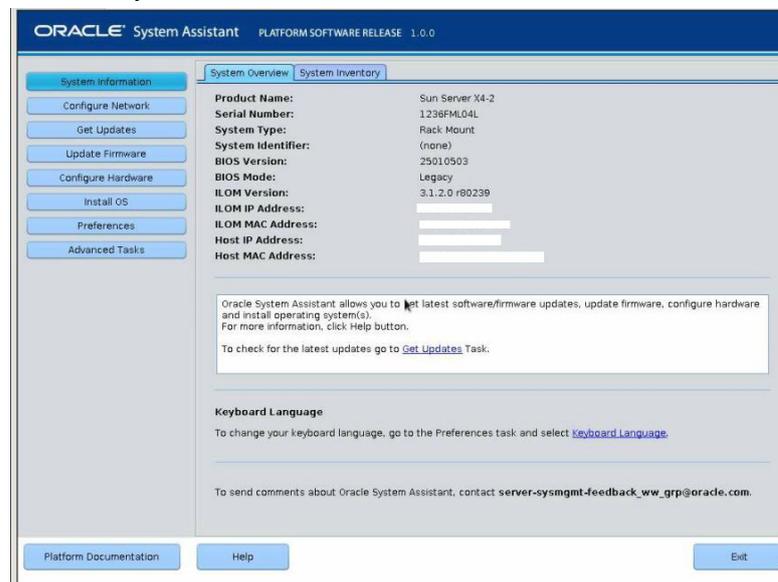
- **ISO イメージの場合。**ISO イメージが使用可能であり、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションが最初の ISO イメージの場所を認識していることを確認します。

インストールメディアの設定方法については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。

2. Oracle ILOM インタフェースから直接 Oracle System Assistant を起動する (推奨) 場合は、次の手順を実行します。それ以外の場合は、[26 ページのステップ 3](#)に進みます。
 - a. Oracle ILOM Web インタフェースの「Actions」パネル (下を参照) で Oracle System Assistant の「Launch」ボタンをクリックします。



「Oracle System Assistant Overview」画面が表示されます。



- b. [27 ページのステップ 4](#)に進みます。
3. Oracle ILOM リモートコンソールと BIOS を使って Oracle System Assistant を起動するには、次の手順を実行します。
 - a. **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Summary」>「Launch Remote Console」をクリックします。

「Oracle ILOM Remote Console」画面が表示されます。

-
- b. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

例:

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- **Oracle ILOM CLI** で「`reset /System`」と入力します

Oracle ILOM リモートコンソールに BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

-
- c. F9 キーを押します。

Oracle System Assistant の「System Overview」画面が表示されます。

4. 最新のソフトウェアリリースパッケージに更新するには、Oracle System Assistant の「Get Updates」ボタンをクリックします。
このアクションにより、OS のインストール開始前に、サーバーに最新のソフトウェアリリースパッケージが確実にインストールされます。



注記

Oracle System Assistant を更新するには、サーバーの Web アクセスが必要です。

-
5. サーバーのファームウェアを更新するには、「Update Firmware」ボタンをクリックします。
このアクションにより、OS のインストール開始前に、サーバーのファームウェアおよび BIOS が確実に最新のものになります。
6. OS をインストールするには、「Install OS」ボタンをクリックします。
「Operating System Installation」画面が表示されます。
7. 「Supported OS」ドロップダウンリストから OS を選択します。

8. 画面の「Select a BIOS mode if applicable」の部分で、OS のインストールに使用する BIOS モード (UEFI またはレガシー BIOS) を選択します。
現在、Oracle Linux 6.3 および 6.4、Red Hat Enterprise Linux 6.4、および SUSE Linux Enterprise Server 11 SP2 だけが、UEFI BIOS モードをサポートする Linux オペレーティングシステムとしてサポートされています。
9. 「Select your install media location」セクションで、インストールメディアの場所を指定します。
これは OS 配布メディアの場所です。CD/DVD デバイスを選択できます。
Oracle System Assistant は、PXE (Preboot eXecution Environment) インストールをサポートしません。
10. 「View Installation Options」をクリックします。
「Installation Options」ダイアログが表示されます。
11. 「Installation Options」ダイアログで、インストールしない項目を選択解除します。
「Installation Options」ダイアログで、「OS」と「Drivers」のオプションは必須であり、選択解除できません。
12. 「Operating System Installation」画面の最下部にある「Install OS」ボタンをクリックします。
13. プロンプトに従ってインストールを完了します。
サーバーがブートします。
14. 必要に応じて Linux オペレーティングシステムインストール後タスクを実行します。
インストール後タスクについては、次のセクションを参照してください。
 - [51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」](#)
 - [61 ページの「RHEL のインストール後のタスク」](#)
 - [73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)

メディアを使用した Oracle Linux の単一システムへのインストール

このセクションでは、Oracle Linux 5.9、6.3、および 6.4 for x86 (64 ビット) オペレーティングシステムのインストール方法について説明します。

- [28 ページの「Oracle Linux OS のインストールのタスクマップ」](#)
- [29 ページの「準備作業」](#)
- [30 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して、Oracle Linux 5.9 をインストールする」](#)
- [37 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して Oracle Linux 6.3 または 6.4 をインストールする」](#)
- [49 ページの「PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする」](#)
- [51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」](#)

Oracle Linux OS のインストールのタスクマップ

これらの手順では、新規インストールで Oracle Linux OS をインストールする手順について説明します。

手順	説明	リンク
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> 『設置』、「サーバーのラックへの設置」 『設置』、「サーバーの配線」 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	Oracle Linux インストールメディアを入手します。	<p>次の Web サイトからインストールメディアをダウンロードまたは注文できます。</p> <p>http://www.oracle.com/us/technologies/linux/index.html</p>
3.	プロダクトノートを確認します。	『Sun Server X4-2L プロダクトノート』(http://www.oracle.com/goto/X4-2L/docs)
4.	インストールの実行に使用するコンソール、Oracle Linux メディア、インストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none"> 8 ページの「コンソール表示オプションの選択」 10 ページの「ブートメディアオプションの選択」 12 ページの「インストール先オプションの選択」
5.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	19 ページの「BIOS の設定」
6.	Oracle Linux OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none"> 30 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して、Oracle Linux 5.9 をインストールする」 37 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して Oracle Linux 6.3 または 6.4 をインストールする」 49 ページの「PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする」
7.	インストール後タスクを実行します。	51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」

関連情報

- 19 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションの詳細については、8 ページの「コンソール表示オプションの選択」を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、10 ページの「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、12 ページの「インストール先オプションの選択」を参照してください。
- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、19 ページの「BIOS の設定」を参照してください。



注記

Oracle Linux 5.9 をインストールするには BIOS をレガシー BIOS ブートモードに設定する必要がありますが、それは、Oracle Linux 5.9 が UEFI BIOS をサポートしないからです。

-
- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる Oracle Linux インストールメディアを用意します。
 - リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに Oracle Linux インストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」を選択していることを確認します。
 - Oracle Linux イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから Oracle Linux ISO イメージにアクセスできることを確認します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM Image」を選択していることを確認します。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して、Oracle Linux 5.9 をインストールする

この手順では、Oracle Linux オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Oracle Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 5.9 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- Oracle Linux 5.9 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)



注記

Oracle Linux 5.9 をインストールするには BIOS をレガシー BIOS ブートモードに設定する必要がありますが、それは、Oracle Linux 5.9 が UEFI BIOS をサポートしないからです。



注記

PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[49 ページの「PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする」](#)で手順を確認してください。

この手順の完了後、この章で後述する、インストール後に必要なタスクを確認して実行する必要があります。詳細は、[51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

- インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - ディストリビューション **CD/DVD** の場合。ローカルまたは外付け CD/DVD-ROM ドライブに、Oracle Linux 5.9 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。

- **ISO イメージの場合**。ISO イメージが Oracle Linux 5.9 で使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、10 ページの「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「`reset /system`」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、Linux OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。





注記

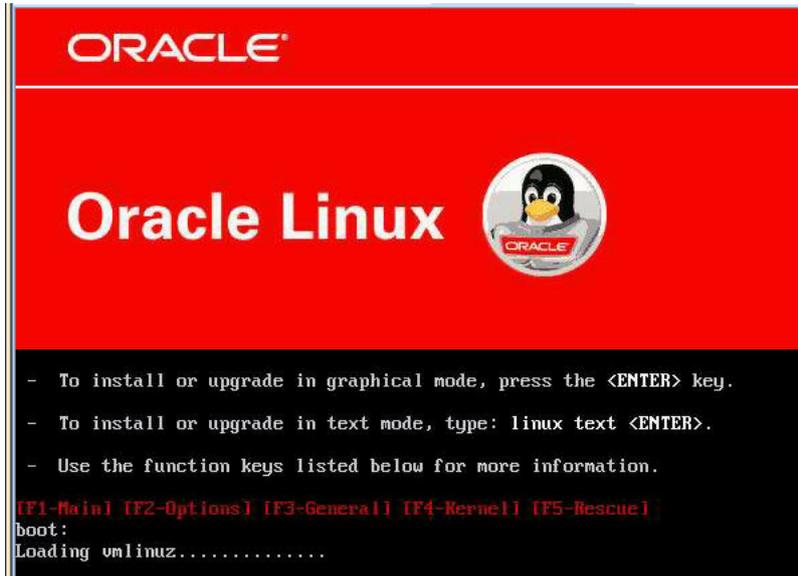
インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した Linux メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、Enter キーを押します。

例:

- Linux OS のローカル配布方法を使用することを選択した場合、画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
- Oracle ILOM リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、画面から **USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00** を選択します。

Oracle Linux 5 のインストール画面が表示されます。

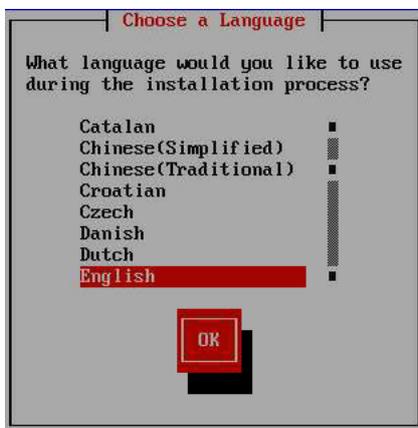


- Oracle Linux 5 のインストール画面で、Enter キーを押して標準的なユーザー対話式インストールを続けます。

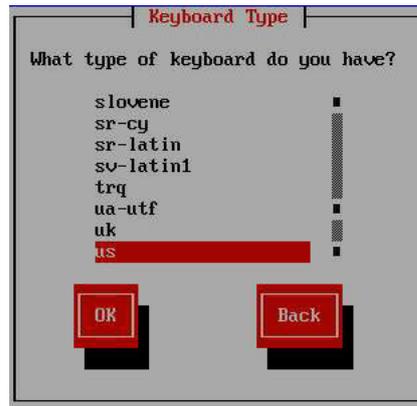
または、テキストモードで、次のコマンドを入力します。

```
boot: linux text
```

言語の画面が表示されます。



6. 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して「OK」をクリックします。
「Keyboard Type」画面が表示されます。



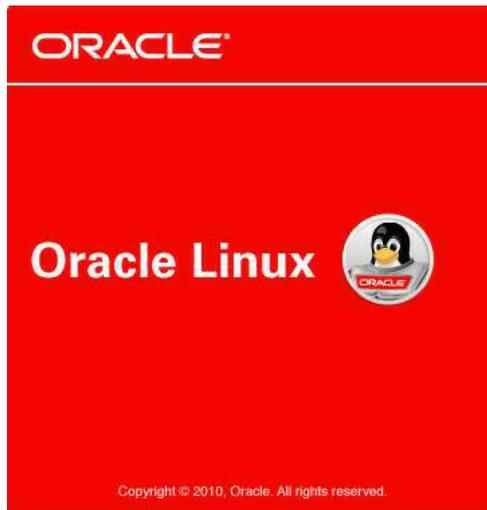
7. 「キーボードタイプ」画面で、適切なキーボード構成を選択してから、「OK」をクリックします。
「Installation Method」画面が表示されます。



8. 「Installation Method」画面で、適切なインストール方法 (「Local CDROM」または「NFS image」) を選択し、「OK」をクリックします。
「Disc Found」画面が表示されます。



9. 今回はじめて、このメディアからインストールを実行している場合は、「OK」をクリックしてメディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「Skip」をクリックします。
Oracle Linux 5 のスプラッシュ画面が表示されます。



10. Oracle Linux 5 のスプラッシュ画面の最下部で、「Next」をクリックします。インストール先のディスクにデータ形式の問題がある場合は、パーティション分割エラーに関する警告が表示されます。



注記

Oracle Linux 5.9 は、GUID パーティションテーブル (GPT) 形式からのブートをサポートしていないので、サイズが 2 テラバイト未満のハードディスクドライブにしかインストールできません。

これがインストールに使用するストレージドライブである場合は、ドライブを再フォーマットする必要があります。それ以外の場合は、この警告を無視してかまいません。



注記

サーバーの出荷時に装備されていたストレージドライブは新しいものなので、フォーマットされていません。フォーマットされていないディスクにインストールする場合には、このエラーは表示されません。

ディスクを再フォーマットするには、「Yes」をクリックします。
それ以外の場合は、「Installation Number」ダイアログが表示されます。

11. 「Installation Number」ダイアログで、「インストール番号」を入力するか、「Skip entering installation number」をクリックし、「OK」をクリックします。
「Disk Partition Setup」画面が表示されます。
12. 「Disk Partition Setup」画面で次を行います。
 - a. 「Remove Linux partition on selected drives and create default layout」のオプションを選択するか、Disk Druid の「Create custom layout」オプションを使用して手動でディスクをパーティションに分割し、「Next」をクリックします。



- b. Oracle Linux のディスクパーティション分割画面に表示される手順を参照して、必要に応じてディスクをパーティションに分割します。



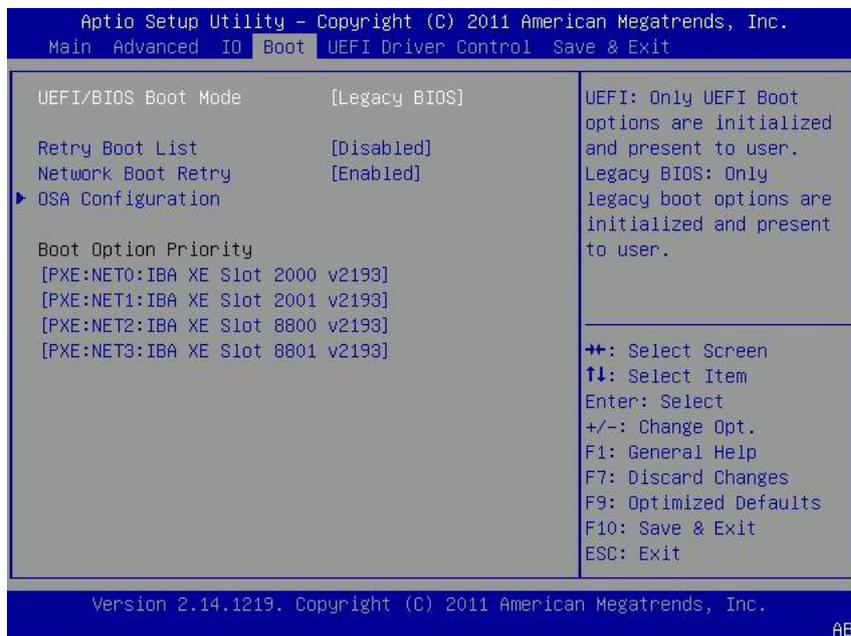
注記

Oracle Linux 6.x OS または Oracle VM ソフトウェアがディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除したり、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートしたりすることもできます。

13. 画面上の指示に従って、Oracle Linux インストールの基本設定を続行します。
14. インストールの完了後、サーバーをリブートします。
BIOS 画面が表示されます。



15. BIOS 設定ユーティリティを実行するには、F2 キーを押します。
BIOS 設定ユーティリティが表示されます。
16. 「Boot」メニューを選択します。
「Boot」メニューが表示されます。



17. 新たにインストールされた OS をデフォルトブートにするには、ターゲットインストールストレージドライブをブート優先順位リストのいちばん上に移したあと、F10 キーを押して変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティを終了させます。
リブートが続行されると、いずれかのカーネル画面が表示されます。



Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux はデフォルトのカーネルです。

18. デフォルトのカーネルを変更しない場合は、[37 ページのステップ 20](#)に進みます。それ以外の場合は、[36 ページのステップ 19](#)に進みます。
19. (オプション) Red Hat 互換カーネルに切り替える場合は、次を実行します。
 - a. いずれかのキーを押します。

GNU GRUB のカーネル選択画面が表示されます。

```
GNU GRUB version 0.97 (613K lower / 2087424K upper memory)

Oracle Linux Server (2.6.39-300.26.1.el5uek)
Oracle Linux Server-base (2.6.18-348.el5)

Use the ↑ and ↓ keys to select which entry is highlighted.
Press enter to boot the selected OS, 'e' to edit the
commands before booting, 'a' to modify the kernel arguments
before booting, or 'c' for a command-line.
```

- b. Red Hat 互換カーネルの場合は、2 番目のメニューオプションを選択したあと、Enter キーを押します。
20. Oracle Linux のインストールを完了し、目的の Linux カーネルでサーバーをリブートしたあと、[51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」](#)の説明に従って、インストール後のタスクを実行します。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して Oracle Linux 6.3 または 6.4 をインストールする

この手順では、Oracle Linux オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Oracle Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 6.3 または 6.4 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- Oracle Linux 6.3 または 6.4 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)



注記

PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[49 ページの「PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする」](#)で手順を確認してください。

1. インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - **ディストリビューション CD/DVD の場合。**ローカルまたはリモート CD/DVD-ROM ドライブに、Oracle Linux 6.3 または 6.4 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。
 - **ISO イメージの場合。**ISO イメージが Oracle Linux 6.3 または 6.4 で使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。インストールメディアの設定方法については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「`reset /System`」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。



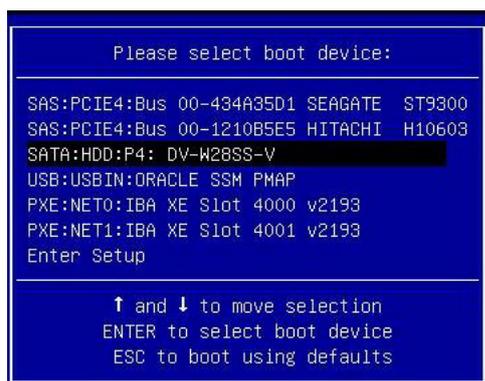
注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、Linux OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS に構成したか UEFI BIOS に構成したかに応じて異なります。

- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:

[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive
[UEFI]PXE:NET0:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET1:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:NET2:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET3:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]Built-in EFI Shell
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```



注記

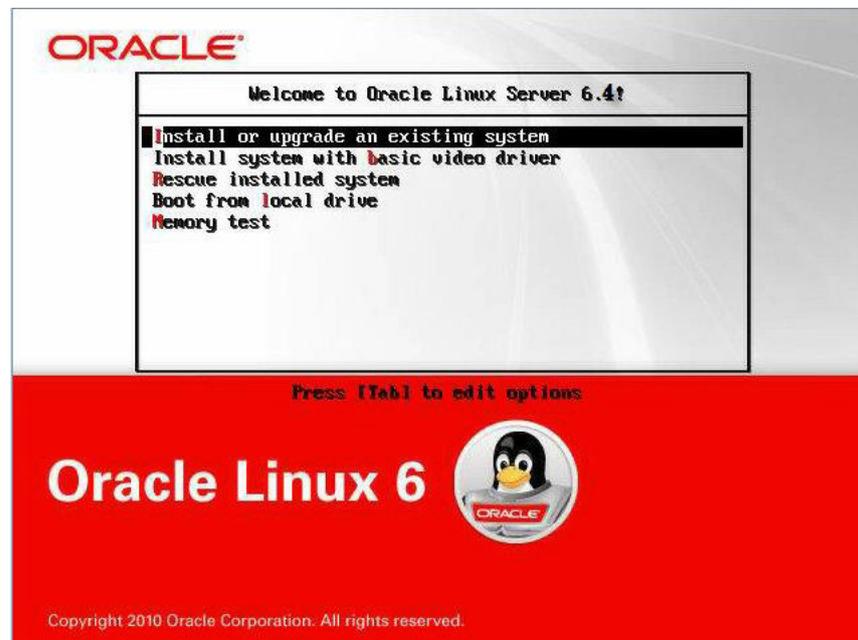
インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

4. 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した Linux OS メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、Enter キーを押します。

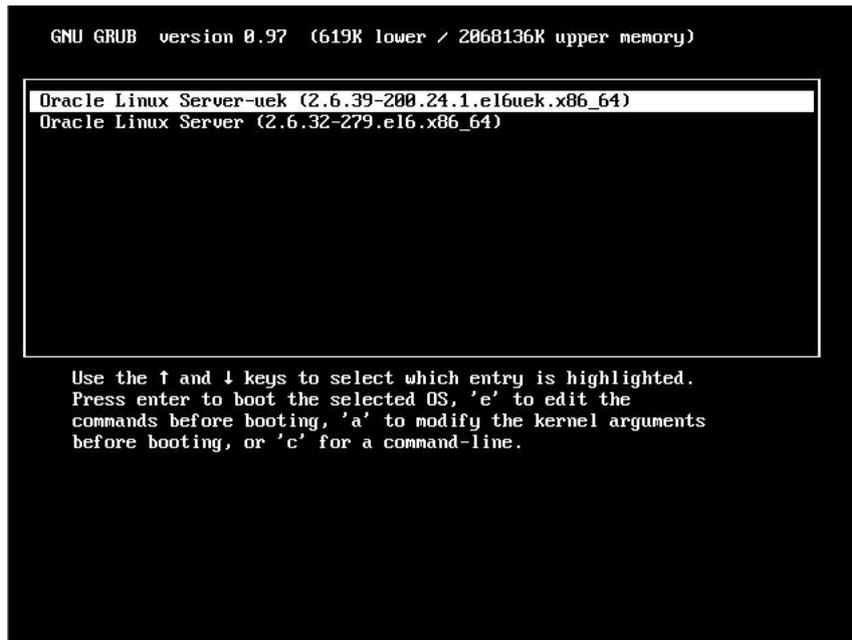
例:

- レガシー BIOS で Linux OS ローカルコンソール配布方法を使用することを選択した場合、レガシー BIOS 画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
- UEFI BIOS モードで Oracle ILOM リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、UEFI BIOS 画面から **[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive** を選択します。

レガシー BIOS の場合、Oracle Linux 6.x の「Welcome」画面が表示されます。



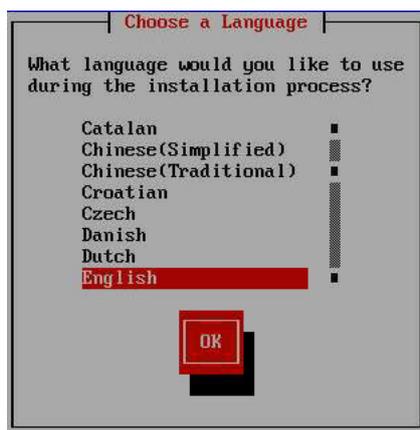
UEFI BIOS の場合、Oracle Linux 6.x GNU GRUB が表示されます。



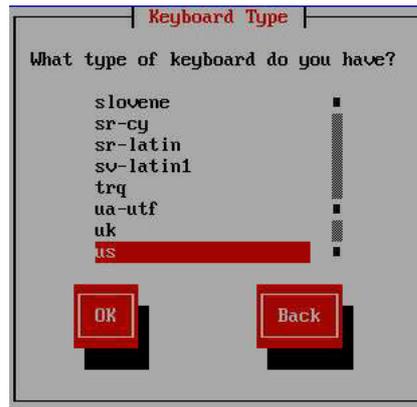
5. 選択した BIOS モードに応じて、次のいずれかを実行します。

- レガシー BIOS ブートモードからインストールするには、Oracle Linux 6.x の「Welcome」画面で「Install or Upgrade an Existing System」を選択し、画面の最下部にある「Next」をクリックし、画面上に表示されるプロンプトに従って対話式インストールを完了します。インストールが完了したら、[46 ページのステップ 17](#)に進みます。
- UEFI BIOS ブートモードからインストールするには、GNU GRUB 画面から Oracle Linux Server 6.x を選択し、Enter キーを押します。

「Choose a Language」画面が表示されます。



6. 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して「OK」をクリックします。「Keyboard Type」画面が表示されます。



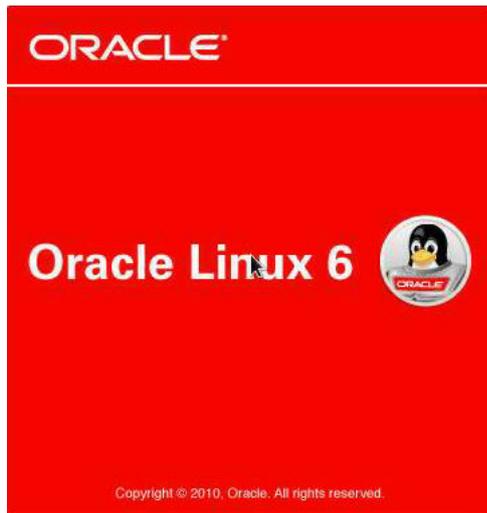
7. 「キーボードタイプ」画面で、適切なキーボード構成を選択してから、「OK」をクリックします。「Installation Method」画面が表示されます。



8. 「Installation Method」画面で、適切なインストール方法（「Local CDROM」または「NFS image」）を選択し、「OK」をクリックします。「Disc Found」画面が表示されます。



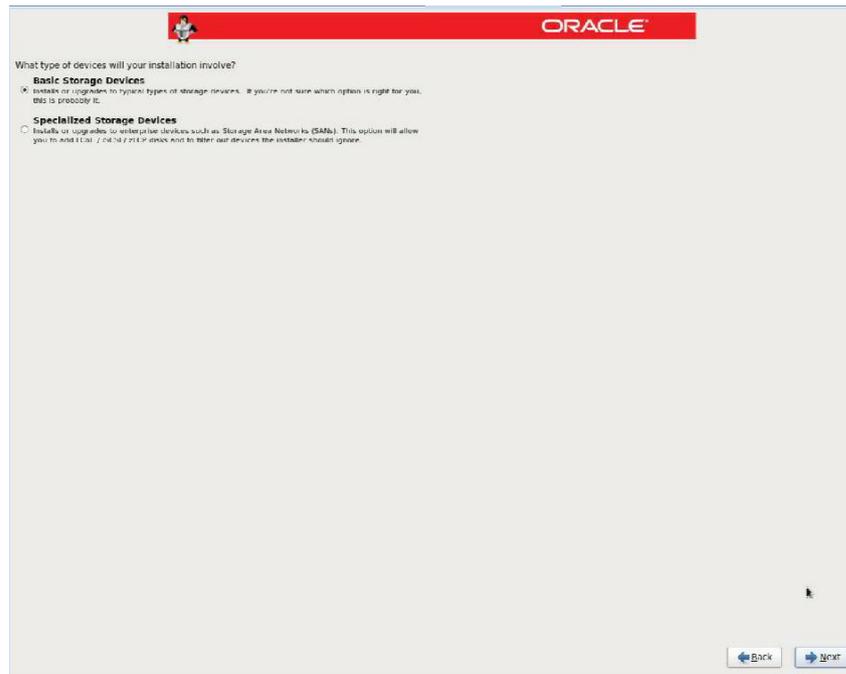
9. 今回はじめてこのメディアからインストールを実行している場合は、「OK」をクリックしてメディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「Skip」をクリックします。Oracle Linux 6 のスプラッシュ画面が表示されます。



10. Oracle Linux 6 のスプラッシュ画面の最下部で、「Next」をクリックします。
いずれかのターゲットディスクにデータ形式の問題がある場合は、パーティション分割エラーの警告が表示されます。



これがインストールに使用するストレージドライブである場合は、ドライブを再フォーマットする必要があります。それ以外の場合は、この警告を無視してかまいません。
ディスクを再フォーマットするには、「Yes」をクリックします。
それ以外の場合は、「Installation Devices」画面が表示されます。

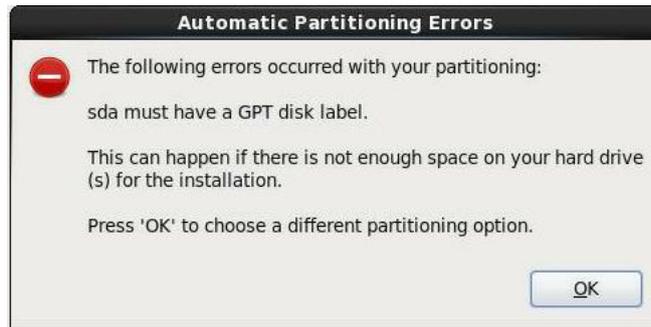


11. 「Installation Devices」画面で、「Basic Storage Devices」を選択して、「Next」をクリックします。
「Examining Devices」画面が表示されます。



12. 「Examining Devices」画面で、「Next」をクリックします。
13. 画面上に表示されるプロンプトに従って、次の手順を実行します。
 - a. ホスト名を入力します。
 - b. (オプション) ネットワークを構成します。
 - c. タイムゾーンを選択します。
 - d. root パスワードを選択します。
 - e. ディスクパーティション分割とレイアウトを選択します。

14. インストール先のディスクにデータ形式の問題がある場合は、「Automatic Partitioning Errors」画面が表示されます。



上の画面が表示された場合は、Linux OS をインストールしようとしているディスクが間違っ
てフォーマットされており、このディスクを再フォーマットする必要があります。



注記

このエラーは、以前レガシー BIOS フォーマットでデータを保存するのに使用していたストレージド
ライブに、UEFI BIOS OS インストールを実行しようとした場合、またはその逆の場合に発生しま
す。UEFI は GUID パーティションテーブル (GPT) フォーマットを使用しますが、レガシー BIOS
はストレージドライブをマスターブートレコード (MBR) フォーマットでフォーマットします。サーバ
ーの出荷時に装備されていたストレージドライブは新しいものなので、フォーマットされていま
せん。フォーマットされていないディスクにインストールする場合には、このエラーは表示されま
せん。

インストールを中止せずにディスクを回復して再フォーマットするには、インストール画面でキー
ボードの「戻る」ボタンを数回クリックし、[33 ページのステップ 9](#)に示す最初のスプラッ
シュ画面に戻って、これらの手順を実行します。

- a. 復旧シェルを開始するには、**Ctrl+Alt+F2** と入力します。

シェルが表示されます。

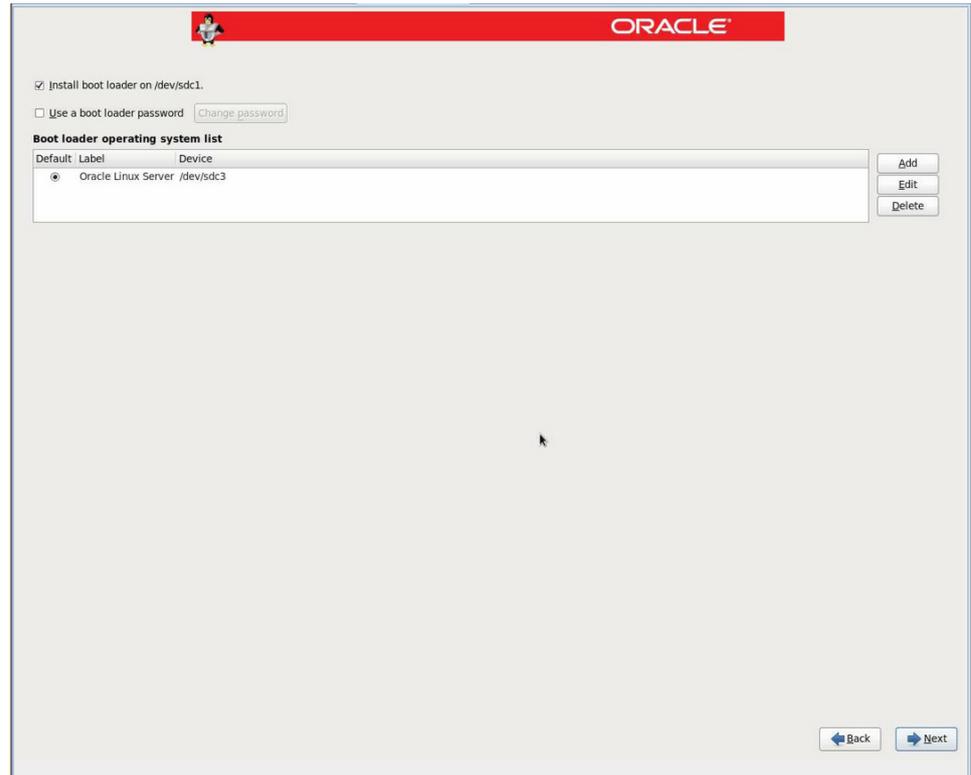
- b. このインストールの必要に応じて GPT 形式または MBR 形式でディスクを再フォーマッ
トするには、次の画面に示すようにシェルコマンドを入力します。

```
anaconda root@localhost [/]# parted /dev/sdc
GNU Parted 2.1
Using /dev/sdc
Welcome to GNU Parted! Type 'help' to view a list of commands.
(parted) p
Model: HITACHI H106030SDSUN300G (scsi)
Disk /dev/sdc: 300GB
Sector size (logical/physical): 512B/512B
Partition Table: msdos
Number  Start   End     Size    Type    File system  Flags
  1      1049kB 21.5GB  21.5GB  primary ext2
(parted) mklabel
New disk label type? gpt
Warning: The existing disk label on /dev/sdc will be destroyed and
all data will be lost.
Do you want to continue?
Yes/No? yes
(parted) p
```

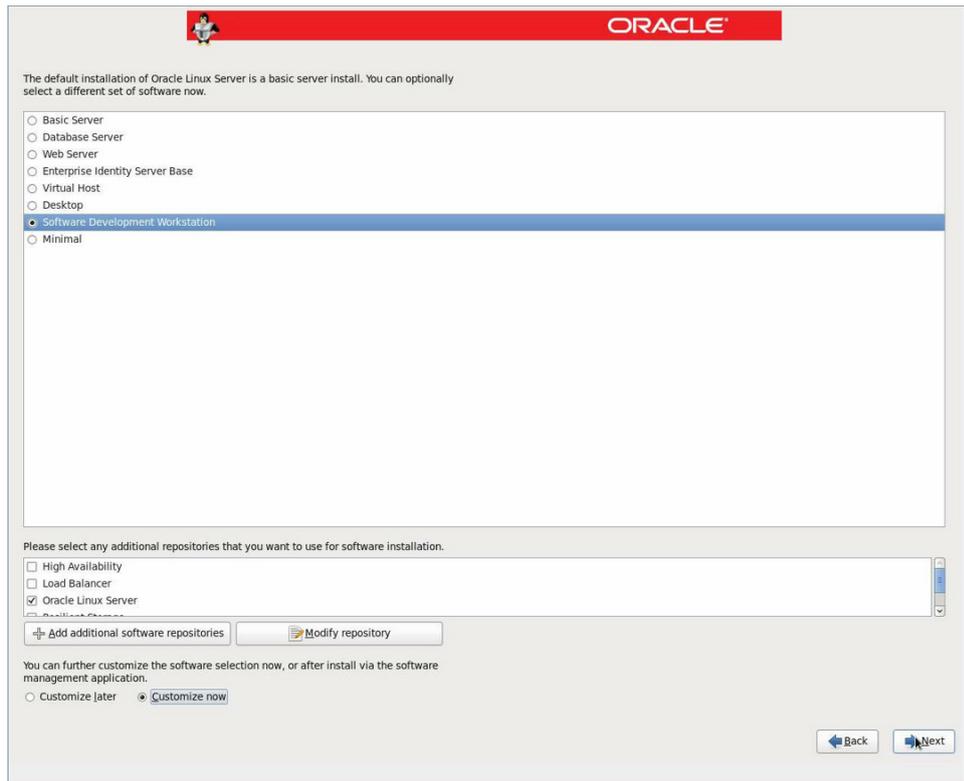
```
Model: HITACHI H106030SDSUN300G (scsi)
Disk /dev/sdc: 300GB
Sector size (logical/physical): 512B/512B
Partition Table: gpt
Number  Start  End  Size  File system  Name  Flags
(parted) g
Information: You may need to update /etc/fstab.
anaconda root@localhost /]#
```

- c. **Ctrl+Alt+F6** と入力して、グラフィカルインストール画面に戻り、Oracle Linux スプラッシュ画面の時点からインストールを続行します (42 ページのステップ 10に移動します)。

それ以外の場合は、「Bootloader」画面が表示されます。



15. 「Bootloader」画面で、「**Next**」をクリックします。
「Select Software」画面が表示されます。



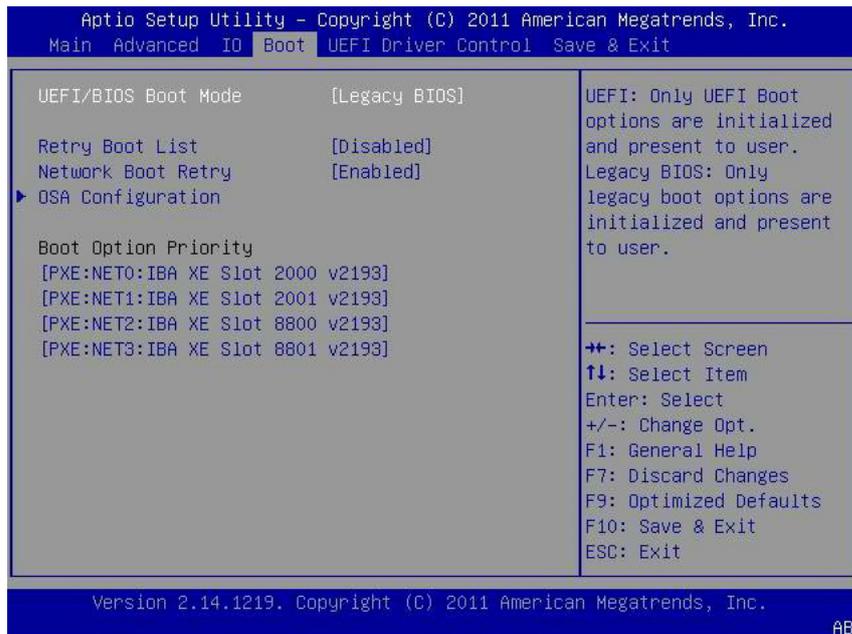
16. 目的のソフトウェアを選択したあと、「Next」をクリックします。
「Starting the Installation Process」画面が表示されます。



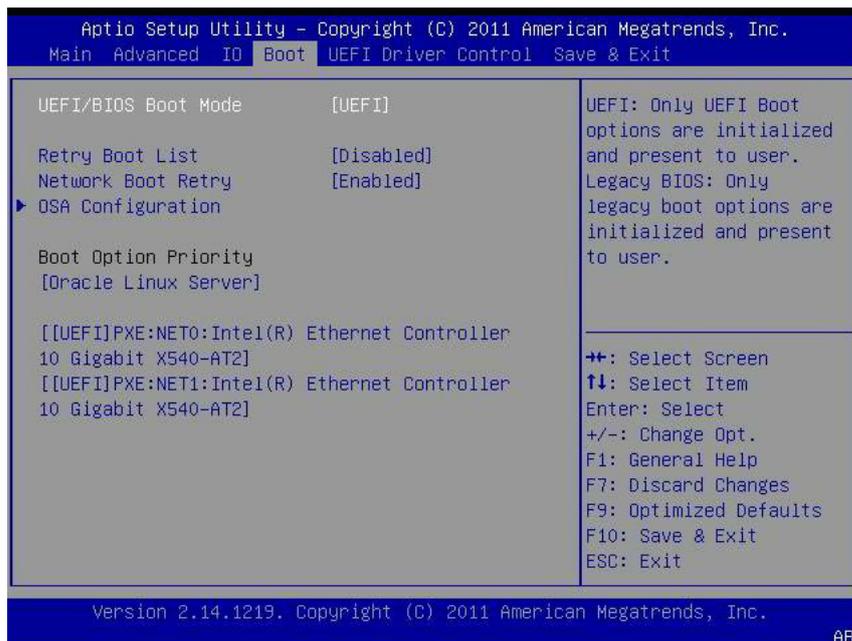
- インストールのユーザー対話が完了しました。
17. インストールの完了後、サーバーをリブートします。
BIOS 画面が表示されます。



18. BIOS 設定ユーティリティを実行するには、F2 キーを押します。
レガシー BIOS の場合、次の BIOS 設定ユーティリティが表示されます。



UEFI BIOS の場合、次の BIOS 設定ユーティリティが表示されます。



19. 新しくインストールした OS をデフォルトブートにするには、次のいずれかを実行します。

- レガシー BIOS の場合:
 - 上部のメニューバーで「Boot」を選択し、「Boot Option Priority」フィールドの下のリストで、インストール先のストレージドライブがいちばん上になっていることを確認します。
 - インストール先ストレージドライブがリストのいちばん上になっていない場合はいちばん上に移動し、F10 キーを押して変更を保存して、BIOS 設定ユーティリティを終了します。
- UEFI BIOS の場合:
 - 上部のメニューバーで「Boot」を選択し、「Boot Option Priority」フィールドの下のリストで、Oracle Linux Server がいちばん上になっていることを確認します。
 - Oracle Linux Server がリストのいちばん上になっていない場合はいちばん上に移動し、F10 キーを押して変更を保存し、BIOS 設定ユーティリティを終了します。

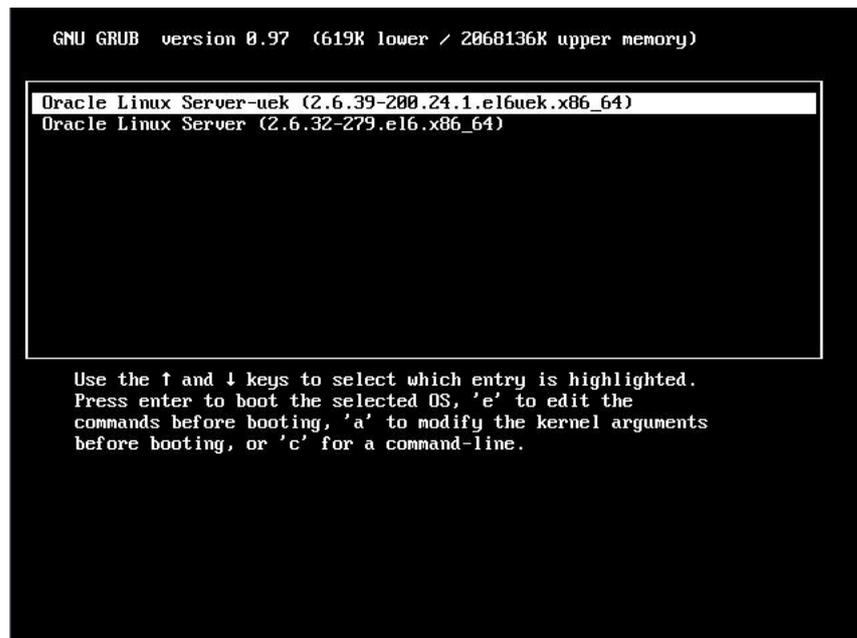
リポートが続行されると、次のカーネル画面のいずれかが表示されます。

```
Press any key to enter the menu
Booting Oracle Linux Server (2.6.39-200.24.1.el6uek.x86_64) in 2
seconds...
```

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux はデフォルトのカーネルです。

20. デフォルトのカーネルを変更しない場合は、[49 ページのステップ 22](#)に進みます。それ以外の場合は、[48 ページのステップ 21](#)に進みます。
21. (オプション) Red Hat 互換カーネルに切り替える場合は、次を実行します。
 - a. いずれかのキーを押します。

GNU GRUB 画面が表示されます。



- b. Red Hat 互換カーネルの場合は、2 番目のメニューオプションを選択したあと、Enter キーを押します。

-
22. Oracle Linux のインストールを完了し、目的の Linux カーネルでサーバーをリブートしたあと、51 ページの「Oracle Linux のインストール後のタスク」に進みます。

▼ PXE ネットワークブートを使用して Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする

このセクションでは、PXE ネットワーク環境から Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 をインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースからインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- Oracle Linux 5.9、6.3、または 6.4 の ISO DVD イメージまたは KickStart イメージ (ネットワークリポジトリ)



注記

KickStart は自動インストールツールです。これによりシステム管理者は、通常は一般的な Oracle Linux のインストール中に入力される、インストールと構成のパラメータの一部またはすべての設定を含めた、単一のイメージを作成できます。通常、KickStart イメージは 1 つのネットワークサーバー上に配置され、インストール時に複数のシステムによって読み取られます。

Oracle Linux PXE インストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- KickStart イメージを使用してインストールを行う場合、次の操作が必要です。
 - KickStart ファイルを作成します。
 - KickStart ファイルを含むブートメディアを作成するか、またはネットワーク上で KickStart ファイルを使用できるようにします。
- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です:
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS、FTP、HTTP) サーバーを構成します。
 - PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
 - PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
 - DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

次の Web サイトにある『*Red Hat Enterprise Linux 5.7: System Administration Guide*』の PXE ネットワークインストール手順に従ってください。

<http://access.redhat.com/site/documentation>

1. PXE ネットワーク環境が正しく設定され、Oracle Linux のインストールメディアを PXE ブートで使用できることを確認します。
2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。
たとえば、サーバーをリセットするには:
 - ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。

- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー **SP** の **Oracle ILOM CLI** で「reset /System」と入力します。
BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。



3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、Linux OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。
「Please Select Boot Device」メニューが表示され、使用可能なブートデバイスが一覧表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS に構成したか UEFI BIOS に構成したかに応じて異なります。
- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。



- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:

[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB USB CD/DVD Drive
[UEFI]PXE:NET0:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET1:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:NET2:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET3:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]Built-in EFI Shell
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```



注記

インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

4. 「Boot Device」メニューで、PXE ネットワークインストールサーバーと通信するように構成されたネットワークポートを選択します。
ネットワークブートローダーがロードされ、起動します。
5. ここから先は、インストール手順はサイトの KickStart ファイルでの指定に従い、サイト固有になります。

Oracle Linux のインストール後のタスク

Oracle Linux をインストールしたあと、システムを Oracle に登録してサブスクリプションをアクティブ化し、ソフトウェアの自動更新を受信するようにしてください。これにより、サーバーで最新版のオペレーティングシステムが実行されることが保証されます。手順については、次を参照してください。

<http://www.oracle.com/technetwork/articles/servers-storage-admin/yum-repo-setup-1659167.html>

メディアを使用した Red Hat Enterprise Linux の単一システムへのインストール

このセクションでは、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.9 および 6.4 for x86 (64 ビット) と Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする手順について説明します。

次のトピックを取り上げます。

- 52 ページの「RHEL のインストールのタスクマップ」
- 52 ページの「準備作業」
- 53 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.9 をインストールする」

- 55 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 6.4 をインストールする」
- 58 ページの「PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする」
- 61 ページの「RHEL のインストール後のタスク」

RHEL のインストールのタスクマップ

これらの手順では、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) オペレーティングシステムのインストール手順について説明します。

手順	説明	リンク
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> • 『設置』、「サーバーのラックへの設置」 • 『設置』、「サーバーの配線」 • 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	RHEL インストールメディアを入手します。	https://access.redhat.com/downloads を参照してください
4.	プロダクトノートを確認します。	『Sun Server X4-2L プロダクトノート』(http://www.oracle.com/goto/X4-2L/docs)
5.	インストールの実行に使用するコンソール、RHEL メディア、およびインストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none"> • 8 ページの「コンソール表示オプションの選択」 • 10 ページの「ブートメディアオプションの選択」 • 12 ページの「インストール先オプションの選択」
6.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	19 ページの「BIOS の設定」
7.	RHEL OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none"> • 53 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.9 をインストールする」 • 55 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 6.4 をインストールする」 • 58 ページの「PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする」
8.	インストール後のタスクを適宜実行します。	61 ページの「RHEL のインストール後のタスク」
9.	(オプション) Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールします。	61 ページの「(オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする」

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションと設定手順の詳細については、[8 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[12 ページの「インストール先オプションの選択」](#)を参照してください。

- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、[19 ページの「BIOS の設定」](#)を参照してください。
- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる Red Hat Enterprise Linux インストールメディアを用意します。
- リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに Red Hat Enterprise Linux インストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」を選択していることを確認します。
- Red Hat Enterprise Linux イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから Red Hat Enterprise Linux ISO イメージにアクセスできることを確認します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」イメージを選択していることを確認します。
- オペレーティングシステムをインストールするための該当するインストール前提条件をすべて満たしているべきです。これらの前提条件については、[19 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」](#)を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.9 をインストールする

この手順では、ローカルメディアまたはリモートメディアから Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.9 オペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから Red Hat Linux のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- RHEL 5.9 の CD または DVD セット (内蔵または外付け CD/DVD)
- RHEL 5.9 の ISO DVD イメージ (ネットワークリポジトリ)



注記

RHEL 5.9 をインストールするには BIOS をレガシー BIOS に設定する必要がありますが、それは、RHEL 5.9 が UEFI BIOS をサポートしないからです。

PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[58 ページの「PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする」](#)で手順を確認してください。

RHEL のインストール方法については、https://access.redhat.com/site/documentation/Red_Hat_Enterprise_Linux/?locale=en-USにある RHEL ドキュメントコレクションを参照してください。

1. インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - **ディストリビューション CD/DVD の場合。**ローカルまたは外付け CD/DVD-ROM ドライブに、RHEL 5.9 配布メディアブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。
 - **ISO イメージの場合。**ISO イメージが RHEL 5.9 で使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、10 ページの「ブートメディアオプションの選択」を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「reset /System」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。

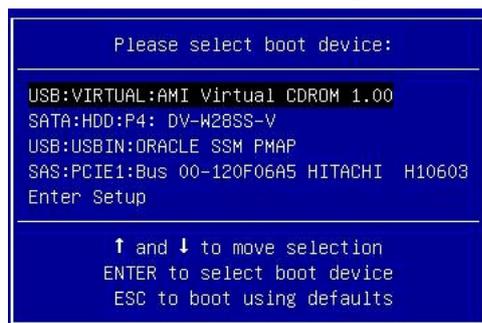


注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、Linux OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。



注記

インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

4. 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した Linux メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、Enter キーを押します。

例:

- ローカル配布方法を使用することを選択した場合、画面から **SATA:HDD:P4 DV-W28SS-V** を選択します。
 - Oracle ILOM リモートコンソール配布方法を使用することを選択した場合は、画面から **USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00** を選択します。
- RHEL 5.9 のインストール画面が表示されます。
5. 画面上の指示と Red Hat のドキュメントに従って、Red Hat インストールの基本設定を続行します。
インストール手順については、https://access.redhat.com/site/documentation/Red_Hat_Enterprise_Linux/?locale=en-US にある『Red Hat Enterprise Linux 5 インストールガイド』を参照してください



注記

Oracle 6.3 および 6.4 OS、Oracle Linux、または Oracle VM がディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除したり、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートしたりすることもできます。

6. Red Hat インストールの基本設定が完了したら、次に示すインストール後のタスクを実行します。
 - a. 自動更新を行うようにシステムを構成します。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。
 - b. 必要な場合は、RHEL 5.9 用の最新の訂正とバグ修正をダウンロードしてインストールします。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。
 - c. この章の後半で説明する、インストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。

[61 ページの「RHEL のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 6.4 をインストールする

次の手順では、ローカルメディアまたはリモートメディアから Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 6.4 オペレーティングシステムのインストールをブートする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから RHEL のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- RHEL 6.4 CD または DVD セット (内蔵または外付けの CD/DVD)
- RHEL 6.4 ISO DVD イメージ

PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[58 ページの「PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする」](#)で手順を確認してください。

RHEL のインストール方法については、https://access.redhat.com/site/documentation/Red_Hat_Enterprise_Linux/?locale=en-US にある RHEL ドキュメントコレクションを参照してください。

1. インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - **ディストリビューション CD/DVD の場合。**ローカルまたはリモートの USB CD/DVD-ROM ドライブに、Red Hat 6.4 配布メディアのブートディスク (番号 1 が付いた CD、または単一の DVD) を挿入します。
 - **ISO イメージの場合。**Red Hat 6.4 ISO イメージが使用できることと、Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションでブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアの設定方法については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

- **ローカルサーバーから、**サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
- **Oracle ILOM Web インタフェースで、**「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
- **サーバー SP の Oracle ILOM CLI で**「`reset /System`」と入力します。

BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、RHEL のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。

表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS に構成したか UEFI BIOS に構成したかに応じて異なります。

 - レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:
SAS:PCIE4:Bus 00-1210B675 HITACHI H10603
USB:USBIN:ORACLE SSM PMAP
SAS:PCIE4:Bus 00-12111DED HITACHI H10603
SAS:PCIE4:Bus 00-BC1EB8A4 LSI Logica
SAS:PCIE4:Bus 00-87BF55D5 LSI Logica
SAS:PCIE4:Bus 00-1210B4D9 HITACHI H10603
SAS:PCIE4:Bus 00-120FACA1 HITACHI H10603
PXE:NET0:IBA XE Slot 2000 v2193
PXE:NET1:IBA XE Slot 2001 v2193
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```

- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:
[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive
[UEFI]PXE:NET0:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET1:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:NET2:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET3:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]Built-in EFI Shell
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```



注記

インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

4. 「Please Select Boot Device」メニューで、最初のブートデバイスを内蔵、外付け、または仮想 CD/DVD デバイスから選択し、Enter キーを押します。
数秒後、RHEL インストールのスプラッシュ画面が表示されます。スプラッシュ画面の下半分に、説明、ファンクションキー、およびブートプロンプトが表示されます。
5. Red Hat Enterprise Linux のスプラッシュ画面で、「**Next**」をクリックして標準的な対話式インストールを続けます。
または、テキストモードで、次のコマンドを入力します。

```
boot: linux text
```

6. 画面上の指示と Red Hat のドキュメントに従って、Red Hat インストールの基本設定を続行します。
インストール手順については、次の場所にある『Red Hat Enterprise Linux 6 インストールガイド』を参照してください。
https://access.redhat.com/site/documentation/Red_Hat_Enterprise_Linux/?locale=en-US



注記

Oracle 6.3 および 6.4 OS または Oracle VM がディスクにインストール済みの場合は、ディスクをパーティションに分割してインストール済みの OS を削除したり、インストール済みの OS を削除せずにディスクをパーティションに分割し、デュアルブートオペレーティングシステムをサポートしたりすることもできます。

7. Red Hat インストールの基本設定が完了したら、次に示すインストール後のタスクを実行します。

a. 自動更新を行うようにシステムを構成します。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。

b. 必要な場合は、RHEL 6.4 用の最新の訂正とバグ修正をダウンロードしてインストールします。

詳細は、Red Hat のドキュメントを参照してください。

c. この章の後半で説明する、インストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。

[61 ページの「RHEL のインストール後のタスク」](#)を参照してください。

▼ PXE ネットワークブートを使用して RHEL 5.9 または 6.4 をインストールする

次の手順では、PXE ネットワーク環境から Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.9 または 6.4 をブートする方法について説明します。RHEL 5.9 または 6.4 の KickStart イメージ (ネットワークリポジトリ) からインストールメディアをブートすることを前提にしています。

KickStart は、Red Hat の自動インストール方法です。これによりシステム管理者は、通常は一般的な Red Hat Linux のインストール中に入力される、インストールと構成のパラメータの一部またはすべての設定を含めた、単一のイメージを作成できます。通常、KickStart イメージは 1 つのネットワークサーバー上に配置され、インストール時に複数のシステムによって読み取られます。

PXE ネットワークブート環境から RHEL のインストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- KickStart イメージを使用してインストールを行う場合、次の操作が必要です。
 - KickStart ファイルを作成します。
 - KickStart ファイルを含むブートメディアを作成するか、またはネットワーク上で KickStart ファイルを使用できるようにします。
- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です:
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS, FTP, HTTP) サーバーを構成します。
 - PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
 - PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
 - DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

次にある『Red Hat Enterprise Linux 5: System Administration Guide』の PXE ネットワークインストール手順に従ってください。

https://access.redhat.com/site/documentation/Red_Hat_Enterprise_Linux/?locale=en-US

1. PXE ネットワーク環境が正しく設定され、RHEL のインストールメディアを PXE ブートで使用できることを確認します。
2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。
たとえば、サーバーをリセットするには:
 - ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「`reset /system`」と入力します。BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、RHEL のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。
表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS に構成したか UEFI BIOS に構成したかに応じて異なります。



注記

RHEL 5.9 はレガシー BIOS のみをサポートします。RHEL 5.9 は UEFI BIOS をサポートしません。

- RHEL 5.9 の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:

USB:VIRTUAL:AMI Virtual CDROM 1.00
SATA:HDD:P4: DV-W2BSS-V
USB:USBIN:ORACLE SSM PMAP
SAS:PCIE1:Bus 00-120F06A5 HITACHI H10603
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```

- レガシー BIOS の RHEL 6.4 の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:

SAS:PCIE4:Bus 00-1210B675 HITACHI H10603
USB:USBIN:ORACLE SSM PMAP
SAS:PCIE4:Bus 00-12111DED HITACHI H10603
SAS:PCIE4:Bus 00-BC1EB8A4 LSI Logica
SAS:PCIE4:Bus 00-87BF55D5 LSI Logica
SAS:PCIE4:Bus 00-1210B4D9 HITACHI H10603
SAS:PCIE4:Bus 00-120FACA1 HITACHI H10603
PXE:NET0:IBA XE Slot 2000 v2193
PXE:NET1:IBA XE Slot 2001 v2193
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```

- UEFI BIOS モードの RHEL 6.4 の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:

[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive
[UEFI]PXE:NET0:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET1:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:NET2:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET3:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]Built-in EFI Shell
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```



注記

インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

- 「Please Select Boot Device」メニューで、PXE ネットワークインストールサーバーと通信するように構成されたネットワークポートを選択して、Enter キーを押します。
ネットワークブートローダーが読み込まれ、ブートプロンプトが表示されます。数秒後、インストールカーネルのロードが開始されます。
- インストールを続行するには、次のいずれかを行います。

-
- Red Hat 5.9 の場合、53 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 5.9 をインストールする」の55 ページのステップ 5 に進みます。
 - Red Hat 6.4 の場合、55 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用して RHEL 6.4 をインストールする」の57 ページのステップ 6 に進みます。

RHEL のインストール後のタスク

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) のインストールの完了後、次のインストール後のタスクを確認し、使用しているシステムで該当するタスクを実行するようにしてください。

- 61 ページの「RHEL を登録し自動更新を有効にする」
- 61 ページの「(オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする」

RHEL を登録し自動更新を有効にする

Red Hat Enterprise Linux (RHEL) をインストールしたあと、RHEL サブスクリプションをアクティブ化してソフトウェアの自動更新を受信するようにしてください。詳細は、次の Web サイトにある Red Hat のサポートを参照してください。

<https://www.redhat.com/support/>

▼ (オプション) ローカルまたはリモートコンソールを使用して RHEL に Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux をインストールする

Red Hat Enterprise Linux OS をインストールしたあと、Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux をインストールして使用することもできます。

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux をインストールする前に、Red Hat Enterprise Linux (RHEL) 5.9 または 6.4 をサーバーにインストールしておく必要があります。

この手順では、2 つのシナリオの手順について説明します。

- RHEL 5.9 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のインストール
- RHEL 6.4 への Oracle Unbreakable Enterprise Kernel Release 2 for Linux のインストール

このカーネルをインストールするには、次の手順を実行します。



注記

この手順では、システム上の yum がデフォルトの `/etc/yum.repos.d` ディレクトリでリポジトリファイルを検索するように構成されていることを前提としています。

-
1. Oracle Unbreakable Enterprise Kernel をインストールする前に、システムで Red Hat Enterprise Linux 5.9 または 6.4 が動作していることを確認します。

-
2. システムで動作している RHEL OS のバージョンに応じて、適切なリポジトリファイルのダウンロードおよび編集を実行します。

- RHEL 5.9 が動作している場合、次の手順を実行して、Oracle Linux 5 yum リポジトリファイルのダウンロードと編集を行います。

- a. `# cd /etc/yum.repos.d`
- b. `# wget http://public-yum.oracle.com/public-yum-el5.repo`
- c. エディタで `public-yum-el5.repo` ファイルを開きます。
- d. `[el5_u5_base]`、`[ol5_u5_base]`、および `[ol5_UEK_latest]` スタンザを編集し、次のように `enable=0` を `enable=1` に変更します。

```
[el5_u5_base]
name=Enterprise Linux $releasever Update 5 installation media
copy ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/EnterpriseLinux/
EL5/5/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enabled=1

[ol5_u5_base]
name=Oracle Linux $releasever Update 5 installation media copy
($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL5/5/
base/x86_64/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enabled=1

[ol5_UEK_latest]
name=Latest Unbreakable Enterprise Kernel for Oracle Linux
$releasever ($basearch)
baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/OracleLinux/OL5/UEK/
latest/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-el5
gpgcheck=1
enable=1
```

- RHEL 6.4 が動作している場合、次の手順を実行して、Oracle Linux 6 yum リポジトリファイルのダウンロードと編集を行います。

- a. `# cd /etc/yum.repos.d`
- b. `# wget http://public-yum.oracle.com/public-yum-ol6.repo`
- c. エディタで `public-yum-ol6.repo` ファイルを開きます。
- d. `[ol6_ga_base]` スタンザを編集して、次のように `enable=0` を `enable=1` に変更します。

```
[ol6_ga_base]
name=Oracle Linux $releasever GA installation media copy
($basearch)baseurl=http://public-yum.oracle.com/repo/
OracleLinux/OL6/0/base/$basearch/
gpgkey=http://public-yum.oracle.com/RPM-GPG-KEY-oracle-ol6
gpgcheck=1
enable=1
```

3. システムカーネルを Oracle Unbreakable Enterprise Kernel に更新するには、次のいずれかを実行します
 - RHEL 5.9 が動作している場合は、次のいずれかを実行して、システムカーネルを更新します。
 - システムカーネルを更新するには、次のコマンドを入力します。


```
# yum install kernel
```
 - または
 - システムカーネルを更新し、関連するすべての推奨パッケージをアップグレードするには、次のコマンドを入力します。


```
# yum install oracle-linux
```
 - RHEL 6.4 が動作している場合は、次のいずれかを実行して、システムカーネルを更新します。
 - システムカーネルを更新するには、次のコマンドを入力します。


```
# yum install kernel-uek
```
 - または
 - システムカーネルを更新し、関連するすべての推奨パッケージをアップグレードするには、次のコマンドを入力します。


```
# yum update
```
4. 新しくインストールした Oracle Unbreakable Enterprise Kernel を実行するには、システムをリブートします。



注記

Oracle Unbreakable Enterprise Kernel for Linux の詳細については、<https://oss.oracle.com/ol6/docs/RELEASE-NOTES-UEK2-en.html> にあるリリースノートを参照してください。

メディアを使用した SUSE Linux Enterprise Server の単一システムへのインストール

このセクションでは、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 for x86 (64 ビット) をインストールする手順について説明します。

次のトピックを取り上げます。

- [64 ページの「SLES 11 SP2 のインストールのタスクマップ」](#)
- [64 ページの「準備作業」](#)
- [65 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した SLES 11 SP2 のインストール」](#)
- [71 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする」](#)
- [73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)

SLES 11 SP2 のインストールのタスクマップ

これらの手順では、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 オペレーティングシステムのインストール手順について説明します。

手順	説明	手順
1.	サーバーハードウェアを設置し、Oracle ILOM サービスプロセッサを構成します。	<ul style="list-style-type: none"> 『設置』、「サーバーのラックへの設置」 『設置』、「サーバーの配線」 『設置』、「Oracle ILOM への接続」
2.	SLES インストールメディアを入手します。	https://www.suse.com/products/server/ を参照してください
3.	プロダクトノートを確認します。	『Sun Server X4-2L プロダクトノート』(http://www.oracle.com/goto/X4-2L/docs)
4.	インストールの実行に使用するコンソール、SLES メディア、およびインストール先を設定します。	<ul style="list-style-type: none"> 8 ページの「コンソール表示オプションの選択」 10 ページの「ブートメディアオプションの選択」 12 ページの「インストール先オプションの選択」
5.	OS の新規インストール用に BIOS 設定を指定します。	19 ページの「BIOS の設定」
6.	SLES OS をインストールします。	<ul style="list-style-type: none"> 65 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した SLES 11 SP2 のインストール」 71 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする」
7.	インストール後のタスクを適宜実行します。	73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」

準備作業

次の要件が満たされていることを確認します。

- インストールの実行前に、コンソール表示オプションが選択および設定されている必要があります。このオプションと設定手順の詳細については、[8 ページの「コンソール表示オプションの選択」](#)を参照してください。
- ブートメディアオプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。
- インストール先オプションは、インストールの実行前に選択および設定するようにしてください。このオプションと設定手順の詳細については、[12 ページの「インストール先オプションの選択」](#)を参照してください。
- BIOS 設定が適切に指定されたことを確認します。BIOS 設定を確認し、必要に応じて設定する手順については、[19 ページの「BIOS の設定」](#)を参照してください。
- ローカルインストールの場合、プロンプトが表示されたときに、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブに挿入できる SLES OS インストールメディアを用意します。
- リモートインストールの場合、Oracle ILOM リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブに SLES OS のインストールメディアを挿入します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM」を選択していることを確認します。
- SLES OS イメージを使用している場合は、Oracle ILOM リモートコンソールシステムから SLES OS ISO イメージにアクセスできることを確認します。Oracle ILOM リモートコンソールシステムの「Devices」メニューで「CD-ROM Image」を選択していることを確認します。

-
- オペレーティングシステムをインストールするための該当するインストール前提条件をすべて満たしているべきです。これらの前提条件については、[19 ページの「オペレーティングシステムのインストールの準備」](#)を参照してください。

▼ ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した SLES 11 SP2 のインストール

この手順では、SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 オペレーティングシステムをローカルメディアまたはリモートメディアからブートする方法について説明します。この手順では、次のいずれかのソースから SLES 11 のインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- SLES 11 SP2 の CD または DVD セット (内蔵または外付けの CD/DVD)
- SLES 11 SP2 ISO DVD イメージ



注記

PXE 環境からインストールメディアをブートする場合は、[71 ページの「PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする」](#)でブート手順を確認してください。

SLES 11 SP2 のインストールについては、次の Web サイトにある SUSE Linux Enterprise Server のドキュメントコレクションを参照してください。

<https://www.suse.com/documentation/sles11/>

1. インストールメディアがブートに使用できることを確認します。
 - **ディストリビューション CD/DVD の場合。**ローカルまたは外付け CD/DVD-ROM ドライブに、SLES 11 SP2 ブートディスク (番号 1 が付いた CD、または DVD) を挿入します。
 - **ISO イメージの場合。**SLES 11 SP2 ISO イメージが使用できること、およびブートディスクイメージ (番号 1 が付いた CD、または DVD) が Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションで選択されていること (「Devices」メニュー > 「CD-ROM Image」) を確認します。

インストールメディアを設定する方法の詳細については、[10 ページの「ブートメディアオプションの選択」](#)を参照してください。

2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。

たとえば、サーバーをリセットするには:

 - **ローカルサーバーから、**サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web インタフェースで、**「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - **サーバー SP の Oracle ILOM CLI で**「`reset /system`」と入力します。BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

- BIOS 画面で、F8 キーを押して、SLES OS のインストールで使用する一時ブートデバイスを指定します。
「Please Select Boot Device」メニューが表示されます。表示される画面は、BIOS をレガシー BIOS に構成したか UEFI BIOS に構成したかに応じて異なります。

- レガシー BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:
-----
USB:VIRTUAL:AMI Virtual CDROM 1.00
SATA:HDD:P4: DV-W28SS-V
USB:USBIN:ORACLE SSM PMAP
SAS:PCIE1:Bus 00-120F06A5 HITACHI H10603
Enter Setup

↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```

- UEFI BIOS の場合、次の画面が表示されます。

```
Please select boot device:
-----
[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive
[UEFI]PXE:NET0:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET1:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:PCIE2:Intel(R) Ethernet Server Adapter X520-2
[UEFI]PXE:NET2:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]PXE:NET3:Intel(R) Ethernet Controller 10 Gigabit X540-AT2
[UEFI]Built-in EFI Shell
Enter Setup

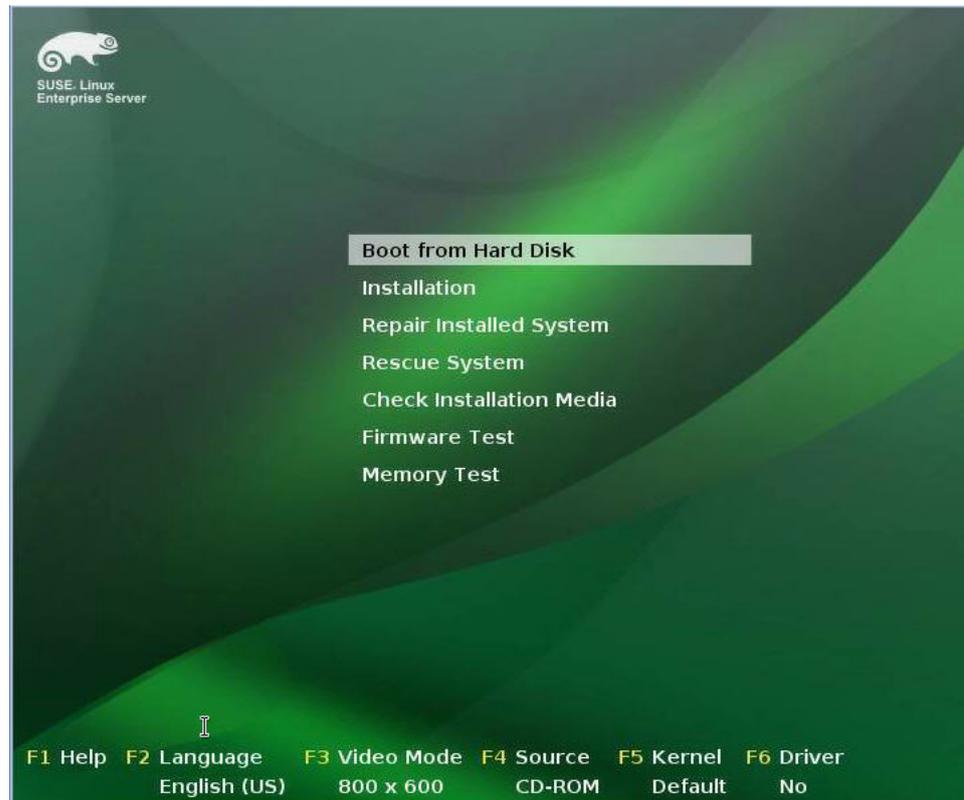
↑ and ↓ to move selection
ENTER to select boot device
ESC to boot using defaults
```



注記

インストール時に表示されるブートデバイスメニューは、サーバーに取り付けられているディスクコントローラのタイプによって異なる場合があります。

4. 「Please Select Boot Device」メニューで、使用対象として選択した SLES OS メディアのインストール方法と BIOS モードに応じたメニュー項目を選択し、Enter キーを押します。たとえば、Oracle ILOM リモートコンソール配布方法を選択した場合は、レガシー BIOS 画面から **USB:VIRTUAL:AMI VIRTUAL CDROM 1.00** を選択するか、UEFI BIOS 画面から **[UEFI]USB:VIRTUAL:USB USB CD/DVD Drive** を選択します。SUSE Linux ブート画面が表示されます。

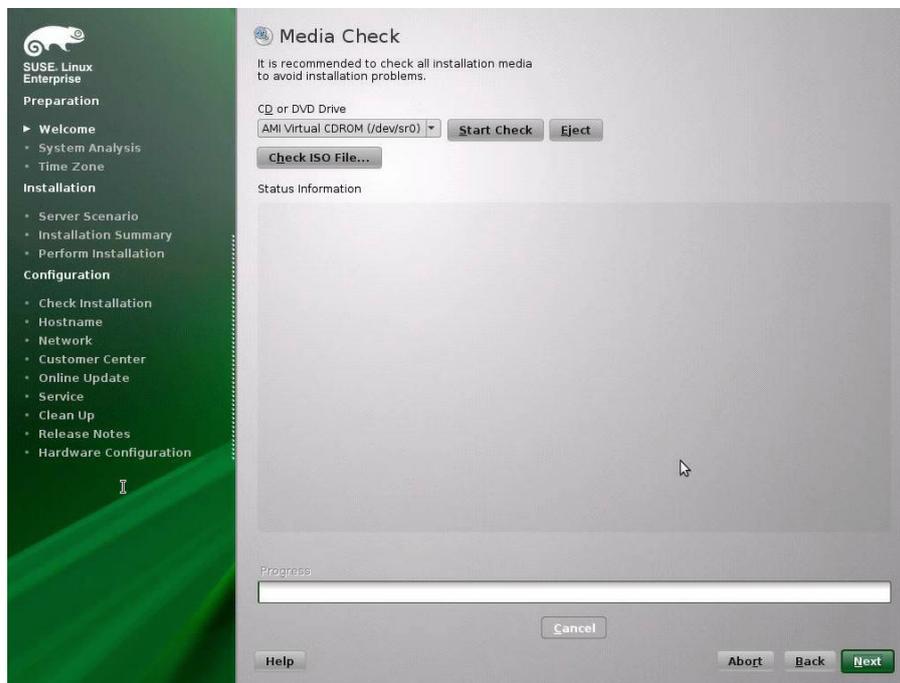


5. SUSE Linux ブート画面で、Tab キーを使用して 2 番目のオプション「**Installation**」を選択し、Enter キーを押します。「Welcome」画面が表示されます。



6. 「Welcome」画面で、次の手順を実行します
 - a. 適切な言語を選択します。
 - b. キーボードレイアウトを選択します。
 - c. ライセンス契約を読み、それに同意します。
 - d. 「Next」をクリックします。

「Media Check」画面が表示されます。



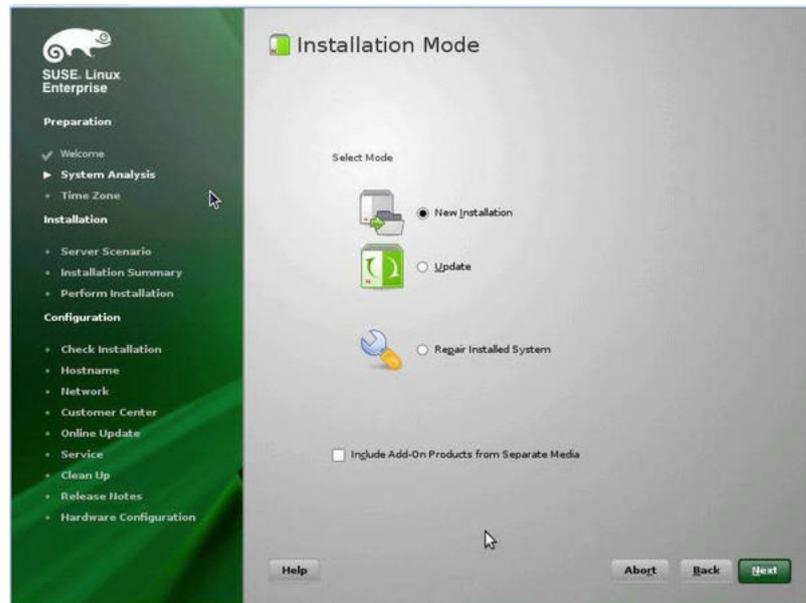
7. 今回はじめて、このメディアからインストールを実行している場合は、メディアをテストすることをお勧めします。それ以外の場合は、「Next」をクリックして、69 ページのステップ 9に進みます。
8. メディアを確認するには、次の手順を実行します。

- a. メディアタイプを選択し、「Start Check」ボタンをクリックします。
- b. メディアの確認が終了したら、「Next」をクリックします。

「System Probing」画面が表示されます。

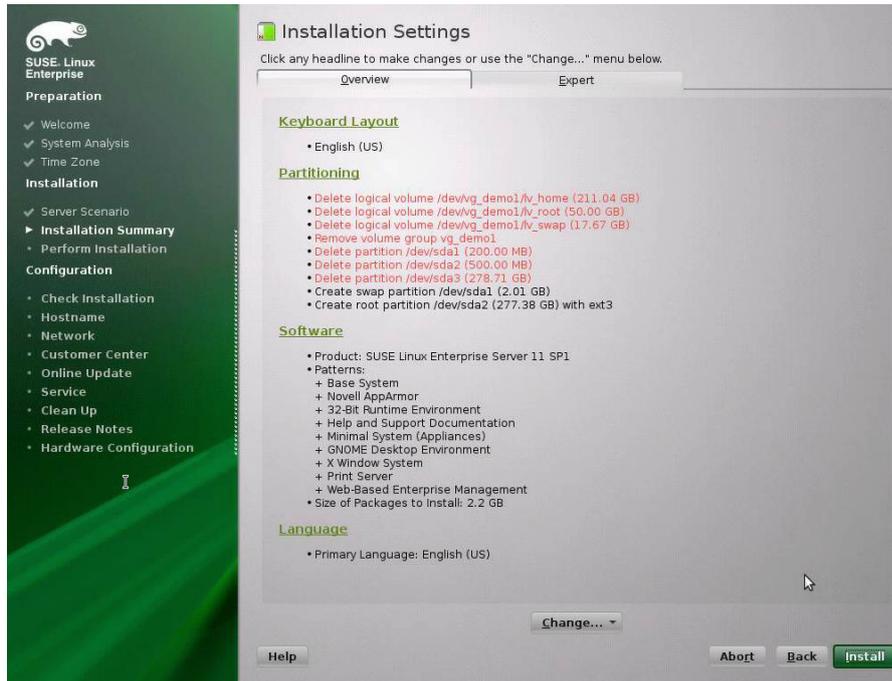


システムの分析が完了したら、「Installation Mode」画面が表示されます。



9. 「Installation Mode」画面で「New Installation」を選択して、「Next」をクリックします。
「Clock and Time Zone」画面が表示されます。
10. 「Clock and Time Zone」画面で、適切な地域とタイムゾーンを選択して、「Next」をクリックします。
「Server Base Scenario」画面が表示されます。

11. 「Server Base Scenario」画面で「Physical Machine」を選択し、「Next」をクリックします。
「Installation Settings」画面が表示されます。



12. 「Installation Settings」画面で、次のいずれかの手順を実行します。
 - 「Install」をクリックして、表示されているインストール設定を受け入れます。または
 - 「Change」をクリックして設定を編集してから、「Install」をクリックして変更した設定でインストールします。



注記

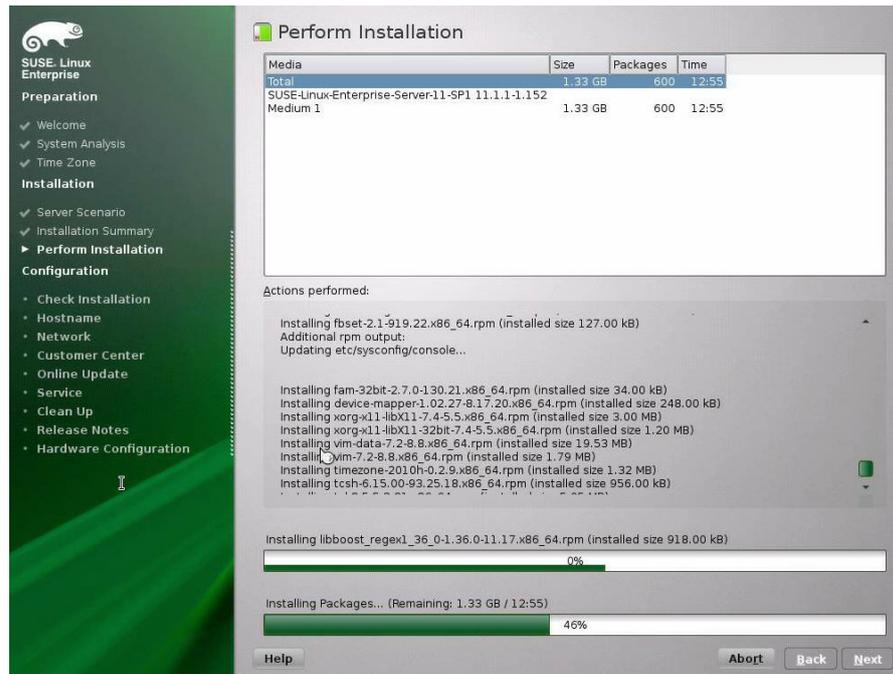
カスタムパーティションの作成方法、またはその他のインストール設定の編集方法については、SLES 11 のドキュメントを参照してください。

「Confirm Package License」画面が表示されます。

13. 「Confirm Package License」画面で、次の手順を実行します。
 - a. 使用許諾契約を読みます。
 - b. 「I Agree」をクリックします。
 - c. 「Install」をクリックします。

「Confirm Installation」ダイアログが表示されます。

14. 「Confirm Installation」ダイアログで、メッセージを読み、「Install」をクリックしてインストールを開始します。
「Perform Installation」ダイアログが表示されます。



15. SLES 11 OS のすべてのファイルがインストールされてシステムがリブートされるまで、インストールの基本セットアップを続行します。
16. インストールの基本設定が完了し、システムがリブートしたら、SLES 11 ドキュメントを参照して次のタスクを実行します。
 - a. 使用するアカウントのパスワードを作成します。
 - b. インターネットアクセスおよびネットワーク設定を構成してテストします。
 - c. OS を登録し、オペレーティングシステムで使用できる最新のアップデートをダウンロードします。
17. [73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)で説明するインストール後のタスクを確認し、必要に応じて実行します。

関連情報

- [73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)

▼ PXE ネットワークブートを使用して SLES 11 SP2 をインストールする

この手順では、PXE ネットワーク環境から SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 をブートする方法について説明します。次のソースからインストールメディアをブートすることを前提にしています。

- SLES 11 SP2 の AutoYaST イメージ (ネットワークリポジトリ)

AutoYaST を利用すると、SLES オペレーティングシステムを複数のシステムにインストールできます。AutoYaST を使用した自動インストールの準備方法については、次にある SUSE のドキュメントコレクションを参照してください。

<https://www.suse.com/documentation/sles11/>

PXE ネットワークブート環境から SLES 11 インストールを実行する前に、次の要件を満たす必要があります。

- AutoYaST を使用してインストールを行う場合は、次の操作が必要です。
 - AutoYaST プロファイルを作成します。

SUSE Linux Enterprise Server 11 のドキュメントに記載された AutoYaST のインストール手順に従います。

- PXE を使用してネットワーク経由でインストールメディアをブートするには、次の操作が必要です:
 - インストールツリーをエクスポートするようにネットワーク (NFS, FTP, HTTP) サーバーを構成します。
 - PXE のブートに必要なファイルを TFTP サーバー上に構成します。
 - PXE 構成からブートするように、サーバーの MAC ネットワークポートアドレスを構成します。
 - DHCP (動的ホスト構成プロトコル) を構成します。

SUSE Linux Enterprise Server のドキュメントに記載された、ネットワーク経由で SUSE メディアをブートするための設定手順に従います

この手順を完了したあとで、[73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)の実行が必要になることがあります。

1. PXE ネットワーク環境が正しく設定され、SLES のインストールメディアを PXE ブートで使用できることを確認します。
2. サーバーをリセットするか、サーバーの電源を入れます。
たとえば、サーバーをリセットするには:
 - ローカルサーバーから、サーバーのフロントパネルの電源ボタンを押して (約 1 秒) サーバーの電源を切断し、電源ボタンをもう一度押してサーバーの電源を入れます。
 - **Oracle ILOM Web** インタフェースで、「Host Management」>「Power Control」を選択し、「Select Action」リストボックスから「Reset」を選択します。
 - サーバー SP の **Oracle ILOM CLI** で「`reset /System`」と入力します。BIOS 画面が表示されます。



注記

次のイベントがすぐに発生するため、次の手順では集中する必要があります。画面に表示される時間が短いため、これらのメッセージを注意して観察してください。スクロールバーが表示されないように画面のサイズを拡大してもかまいません。

3. BIOS 画面で、F8 キーを押して、一時ブートデバイスを指定します。
「Please Select Boot Device」メニューが表示され、使用可能なブートデバイスが一覧表示されます。
4. ブートデバイスメニューで、使用している PXE ネットワークインストールサーバーと通信するように構成された PXE インストールブートデバイス (物理ポート) を選択して、Enter キーを押します。
ネットワークブートローダーが読み込まれ、ブートプロンプトが表示されます。タイムアウトしてインストールカーネルの読み込みが開始されるまで 5 秒待ちます。
最初の SUSE Linux ブート画面が表示されます。
5. インストールを続けるには、[65 ページの「ローカルメディアまたはリモートメディアを使用した SLES 11 SP2 のインストール」](#)の [67 ページのステップ 5](#) に進みます。

関連情報

- [73 ページの「SLES 11 SP2 のインストール後のタスク」](#)

SLES 11 SP2 のインストール後のタスク

SUSE Linux Enterprise Server (SLES) 11 SP2 のインストールが完了したら、次のタスクを実行すべきです。

- [73 ページの「SLES オペレーティングシステムを更新する」](#)

▼ SLES オペレーティングシステムを更新する

SUSE Linux Enterprise Server (SLES) OS のインストールメディアには、最新バージョンのオペレーティングシステムが含まれていない場合があります。次の手順では、サーバーの SLES OS を更新する方法について説明します。

1. SLES サーバーにスーパーユーザーとしてログインします。
2. 次のコマンドを入力して、YaST オンラインアップデートを実行します。

```
# you
```

YaST はテキストモードとグラフィカルモードの両方で動作することに注意してください。ここでの指示は、両方に適用されます。
3. サーバーがネットワークファイアウォールで保護されていて、インターネットにアクセスするためにプロキシサーバーを使用する必要がある場合は、まず正しいプロキシ情報で YaST を構成する必要があります。
 - a. 「Network Services」タブを選択してから、右側の「Proxy」画面を選択します。HTTP フィールドと HTTPS フィールドの両方に、正しいプロキシの URL を入力します。



注記

ネットワーク HTTP または HTTPS プロキシを介してオンライン update サービスを正常に機能させるために、次の追加の構成手順を実行する必要があります。

- b. YaST ユーティリティを終了して、次のコマンドを実行します。

```
rug set-prefs proxy-url proxy_URL
```

ここでは、proxy_URL は、プロキシサーバーの完全修飾 URL です (たとえば、`http://proxy.yourdomain:3128/`)。

- c. コマンドの実行の成功後に、YaST を再度起動します。
4. SUSE Customer Center に登録します。



注記

SUSE Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアクティベーションコードが必要です。

- a. 「**Software**」タブを選択します。
 - b. 「SUSE Customer Center Configuration」を選択し、指示に従います。
5. 登録後、「Online Update」タブを選択して、ソフトウェアの更新を実行します。

4

・・・第 4 章

ネットワークインタフェースの構成

このセクションでは、次の情報について説明します。

- ・ [75 ページの「NIC コネクタ」](#)

NIC コネクタ

サーバーのネットワークインタフェースカード (NIC) コネクタには、次のように物理的にラベルが付けられています。

表4.1 Intel NIC コネクタのラベル

Intel NIC コネクタのラベル	インタフェースタイプ
net0	1 番目のインタフェース (Intel ixgbe 0)
net1	2 番目のインタフェース (Intel ixgbe 1)
net2	3 番目のインタフェース (Intel ixgbe 2)
net3	4 番目のインタフェース (Intel ixgbe 3)



注記

単一プロセッサシステムでは、NET 2 および NET 3 は機能しません。

索引

シンボル

- Oracle Linux OS, 49
 - ISO イメージ, 31, 37, 53
 - サーバーの電源リセット, 31, 38, 49, 54, 56, 59, 65, 72
 - ローカルメディアまたはリモートメディアによるインストール, 30, 37
- Oracle System Assistant
 - OS インストールタスク
 - Linux OS, 16
 - 概要
 - Linux OS, 15
 - 入手, 16
 - Linux OS, 16
- Oracle Unbreakable Enterprise Kernel
 - インストール, 61
 - 説明
 - Linux OS, 8

あ

- 一時ブートデバイス
 - Oracle Linux OS, 31, 38, 50, 54, 73
 - RHEL OS, 56, 59
 - SLES OS, 66
- インストール
 - KickStart の使用
 - RHEL OS, 58
 - Oracle System Assistant の使用
 - Linux OS, 14, 25
 - PXE ネットワークブート
 - SLES OS, 71
 - PXE ネットワークブートの使用
 - Oracle Linux OS, 49
 - RHEL OS, 58
 - オプション
 - Linux OS, 13
 - タスクマップ
 - Oracle Linux OS, 28
 - RHEL OS, 52
 - SLES OS, 64
 - メディアの使用
 - Linux OS, 14
 - Oracle Linux OS, 28
 - RHEL OS, 51
 - SLES OS, 63
 - ローカルメディアまたはリモートメディアの使用
 - Oracle Linux OS 5, 30
 - RHEL OS 5, 53
 - RHEL OS 6, 55
 - SLES OS, 65
- インストール後
 - Oracle Unbreakable Enterprise Kernel

- RHEL OS, 61
- オペレーティングシステムの更新
 - SLES OS, 73
- 製品の登録
 - RHEL OS, 61
- タスク
 - Oracle Linux, 51
 - RHEL OS, 61
 - SLES OS, 73
- インストール先
 - オプション
 - Linux OS, 12
 - 選択
 - Linux OS, 12
 - ドライブの制限
 - Linux OS, 12
 - ファイバチャネル Storage Area Network (SAN) デバイス
 - Linux OS, 13
 - ローカルストレージドライブ
 - Linux OS, 13
- インストール方法
 - ブートメディアオプション, 10
- インストールメディア, 25
- オペレーティングシステムのインストール
 - 概要, 7
 - サポートされているオペレーティングシステム, 7
 - オペレーティングシステムのインストールの概要, 7

か

- 構成
 - RAID
 - Linux OS, 23
 - ネットワークインタフェース
 - Linux OS, 75
- コンソール表示
 - オプション
 - Linux OS, 9
 - コンソール表示オプション
 - 選択
 - Linux OS, 8

さ

- サーバー
 - 電源リセット, 31, 38, 49, 54, 56, 59, 65, 72
 - サポートされているオペレーティングシステム, 7
 - Linux OS, 7
- 自動更新
 - RHEL OS, 55, 58
- 製品の登録
 - SLES 11 OS, 71, 74

た

- タスクマップ
 - インストール
 - Oracle Linux OS, 28

RHEL OS, 52
SLES OS, 64

な

ネットワークインタフェース
ラベル付け
Linux OS, 75

は

ブートディスクイメージ
Oracle Linux OS, 30, 37, 53
RHEL OS, 56
SLES OS, 65
ブートメディア
要件
Linux OS, 10
ブートメディアオプション
選択
Linux OS, 10
ブートメディアのインストール, 10

ら

リモートコンソール
設定
Linux OS, 9
リモートブートメディア
設定
Linux OS, 11
要件
Linux OS, 11
ローカルコンソール
設定
Linux OS, 9
ローカルブートメディア
設定, 11
要件
Linux OS, 10